本物を求める青年と救いたい少女

ばやす

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元総武高校生である比企谷八幡は、奉仕部、家族との関係、そしてこれからの生活を捨てて、修学旅行の依頼を解消した。

家族に縁を切られ、夜道を歩く中で彼が出会ったのは、人々を自身の音楽で幸せにしたいと願う一人の少女だった。

追記：毎回誤字報告助かります！いやね？書いてみたら自分では案外気づかないんだよ？っていう言い訳。割とマジで見直しして気付いてないからこれからも報告してくださるとありがたいです！

目次

本物を求める青年と救いたい少女　1
第2話　7
第3話　12
第4話　19
第5話　25
第6話　32
第7話　39
第8話　44
第9話　49
第10話　57
閑話　67
第11話　73
第12話　78
第13話　84
第14話　92
第15話　101
第16話　112
第17話　118
第18話　124
第19話　130
第20話　136
第21話　142
第22話　148
第23話　153

第２４話　本物を求める青年と救いたい少女たち　――――　159
第２５話　――――　168

本物を求める青年と救いたい少女

火のないところに煙は立たない。ということわざがあるが、果たしてこれを考えたのは誰なのだろうか。ただ単に思った事を口にしただけなのか、はたまた自分で実感した事として発したのだろうか。後者の場合、それは他人事だったのだろうか。それとも……

修学旅行が終わったあと、待っていたのは地獄だった。
片や告白の成功、片や告白の阻止、もう片やグループの存続。という相反する依頼を、俺は嘘告白という形で依頼を解決…いや、解消した。
信頼していた部員たちとの関係と、家族と、自分自身の居場所を犠牲にして…。
「あなたのやり方…嫌いだわ。」
なんだよ…、やり方は俺に任せるって言ってくれたじゃないか…。
「ヒッキー…、もっと人の気持ち、考えてよ…!」

人の気持ちを考えられないのはお前もだろうが…。俺はこんなクソみたいな依頼なんて、最初から受けたくなかったのに…、お前が勝手に受けたんだろう？俺の気持ちを無視して…。

「ごみいちゃん！雪乃さんと結衣さんから聞いたよ！謝ってくるまで家に上げないから！あと、この事はお父さんにも言ってるからね！」

小町、お前は家族である俺の事より、精々１年位の付き合いのアイツらのことを信じるのか？こうなってしまっても、小町だけは話を聞いてくれると思っていたのに…。

「八幡！お前、なんてことをしたんだ！嘘告白なんて、そんなことをする奴は息子とは認めん！勘当だ！早くこの家から出ていけ！」

息子とは認めない？ハッ！笑わせてくれる。小町が生まれた時からずっと俺の事なんて見てこなかったくせに。俺もハナからお前のことを親父だなんて認めていない。

「八幡、あなた、また人様に迷惑かけて！小町から聞いたよ！早く謝罪に行ってきなさい！」

また？一体俺はいつ人に迷惑をかけた？こっちは散々お前たちに迷惑してきたのに…。謝罪になんて絶対に行かない。死んでもゴメンだ。

はぁ。今更になって思うけど、俺はよくこんなクソみたいな家族がいる中で１７年も生活出来たよな…。

けど、勘当されて、ようやく自由を手に入れた。学校にだって行かなくていい。家族や部員、俺の噂しか知らない総武校の生徒に罵声を浴びせられることもない。殴られることも、カツアゲに会うことも、もう無い。それと同時に、本物の関係なんて無いということも悟った…。

金はこっそりと株で稼いだ物がある。俺の学歴は高校中退ということになるだろうから、今後も株中心の生活になるだろう。いつか追い出されるだろうとは思っていたが、一人で暮らすための術を身につけておいて本当に良かった。

さて、これから何をして暮らそうか。今の俺の年齢は１７歳。法律改正で１８歳から成人ということになったが、あと約半年はアパートの契約等は１人で出来ない。仕方ないからしばらくはネカフェで過ごすか…。

暗い夜道を歩きながら　今後の人生設計を考えていると、

「ねぇ、ちょっといい？」

と、後ろから不意に声をかけられた。昼間なら人通りもあるしシカト一択なのだが、あいにく今は深夜2時。周りには誰もいない。よって話しかけている相手は俺しかいない。この時間帯なら警察の方かと思ったが、声音からして大人でないことは分かるため違うだろう。

「なんだ、こんな時間に出歩いて。親が心配すんじゃやねぇの？」

振り返って相手の姿を確認すると、ロングストレートで白髪の女子高生?が立っていた。

「今、家に親はいないから…。そっちこそ、こんな時間に何してるの?」

家に親がいない?仕事か入院か、はたまた…。まぁ、相手の家庭事情を考えても仕方がないと思いなおし相手に返す言葉を探す。

「こっちはさっき親に勘当されたばかりでな。これからについて考えながら歩いていた。」

そう返すと、少女はバツの悪そうな顔をする。軽い質問をしただけでかなりヘヴィーな返答が来たから仕方がないと言えばそうなのだが。

「そう、悪いこと聞いたね…。」

「そんで、なんか用でもあんのか?ないならもう行くけど。」

そう言うと、少女は待ってと踵を返そうとした俺を引き留めた。

「もしよかったら、うちに泊まっていかない?」

「……は?」

おもわずに聞き返してしまった。それもそうだろう。お互いに名前も知らない相手から家に誘われた上に、泊まっていくかと聞かれたのだ。驚かない方がおかしい。

「いくら何でも不用心すぎるだろ…。それに、そっちに俺を泊めるメリットがないだ

ろ。」

しかし少女は即座に返答した。

「メリットならあるよ。私は家事ができないからしてもらいたいし、作った音楽の感想が聞きたい。あと、外にはなるべく出たくないから買い出しとかも頼みたい。」

なるほど、彼女からすると俺を泊めることには十分なメリットがあるらしい。しかし…

「…それってほぼ同棲じゃやねぇか…。」

「うん…、できるなら住み込みでお願いしたい。その方がお互いにいいでしょ?」

目の前の少女は俺に襲われる事とかは考えないのだろうか。あったばかりでお互いの人間性がわからないのに、どうしてこんな提案ができるのだろうか。

「俺がお前を襲うとか、そういうことは考えないのか?俺だって男だぞ?」

しかし少女は平然と返す。

「考えてないわけじゃないけど、路頭に迷っている人は見過ごせないし、私の目標は私の作った音楽で困った人々を救うことだから。私はあなたを救いたいし、救う手伝いをしてほしい。」

襲われることも視野に入っているが、それでもなお困っている人を救いたい…か。まるで、修学旅行前の自分を見ているようだ。自分を犠牲にしてでも他人を救う。彼女

の目標を聞いて、俺は目の前の少女に、俺みたいにはなってほしくないと思った。もう他人なんて信用しないと思っていたが、やはり人の本質はそう簡単には変えられないらしい。少なくとも、俺を救いたいという彼女の目に嘘はなかった。

もう一度だけ、信じてみよう。彼女を通して、俺が求めてきた本物が見つかれば万々歳。見つからなければもう一度道を探すだけだ。

「……わかった。しばらくお邪魔させてもらう。俺の名前は、比企谷八幡だ。」

「ありがとう。私は宵崎奏。これからよろしくね、八幡。」

彼女がその時浮かべた、綺麗で、それでいて夜空に吸い込まれてしまいそうなくらい儚い笑みに、つい見入ってしまった。

「どうしたの？帰るよ？」

「お、おう、悪い。」

先に歩く宵崎の缶詰とカップラーメンが大量に入った買い物袋を彼女の代わりに持ち、何を話すわけでもなく帰路についた。

第2話

　奏に案内された家は東京都の一角だった。地理的には渋谷にほど近く、どうやら考え事をしながら歩いている間に、千葉からかなり離れていたらしい。
「着いたよ。さ、上がって。」
「お、お邪魔します…。」
　案内されて入った部屋は、ゴミ屋敷…という程ではないが、かなり散らかっていた。ゴミはキチンと捨てているらしいが、衣類が散らかっていたり、彼女のベッドのシーツがヨレヨレだったり。それでいてシンクは綺麗だったし、埃はあまり舞っていなかった。今日奏の代わりに持った買い物袋から察するに、カップ麺と缶詰だけで食事を済ませている為、皿は必要ないのだろう。埃の少なさについては知らんが、どうやら家事が苦手というのは本当らしい。
「かなり散らかってんな…。明日、きっちり洗濯するわ。」
　追い出される前は専業主夫を目指していたし、家事全般を元家族から押し付けられていたので、家事スキルは人並み以上にはある。洗濯についても、小町や元母の下着を洗

濯してきたから耐性は着いている…筈だ。

「うん、お願い。あ、洗面所はこっちで、トイレはあっちね。」

廊下やリビングの様子を見て、洗面所やトイレもかなり汚れていると思ったのだが、こちらは存外綺麗だった。洗面所に位置するお風呂も同様だ。どうやらここは綺麗に保ちたかったらしい。まぁ、トイレやお風呂が汚かったら萎えるよな…。いや、待てよ？

「奏、お前、トイレとか掃除できるんなら、他の場所も出来るんじゃねぇの？」

と聞くと、奏は首を横に振る。

「ううん。普段は週に2回、家事代行サービスの人に掃除してもらってるの。」

なるほど、これなら納得が行く。埃が少ないのも、代行の人が掃除してくれていたのか。しかし、俺が来たことで、もう頼むことも無いのか？まぁその辺は奏の裁量によるな。

「なるほどな。まぁ、俺は追い出される前に風呂はいってきたし、宵崎も入ってこいよ。」

と言うと、奏は少し不満そうにする。

「宵崎じゃなくて、奏。これから一緒に住むのに、他人行儀で堅苦しいのは嫌だから。」

なるほど、確かに筋は通っている。一緒に住んでいる人が堅苦しかったら、なんか生活しづらいもんな。

「わかった、奏。ほら、行ってこいよ。ベッドのシーツは直しといてやるから。」
そう言うと、わかった。とうなづいて、洗面所に入っていった。
奏に言ったように、一先ずシーツを直してから、明日洗濯しやすい様に散らかった服やタオルを一箇所に集める。
本当は今からでも洗濯してしまいたいが、夜中だし、音が大きくなるので辞めておく。洗濯物については、ブランド品や、モコモコしたような服はなく、ほとんどがジャージなので、仕分ける必要も無さそうだ。
下着に関しては、元家族のもので耐性がつくはずもなく、かなりドキドキした。
洗濯物を集め終わった頃に、奏が風呂から上がった。
「上がったよ。シーツ、直してくれてありがとう。それじゃあ、今から曲を作るから。」
おいおい、まさか今から作業を始めるのか?今はもう深夜3時だぞ?
「もう3時だけど、寝ないのか?」
と聞くと、奏は少し俯いて、
「私は、みんなを幸せにする曲を作り続けないといけないから…。」
そう返答する奏に、俺は何も返せなくなる。これは恐らく、今踏み込んでは行けない事だ。そう予感する。普段ならこんな第六感を信用したりはしないのだが、今回ばかりは従っておこうと思う。

しかし、こんな時間に寝もせずに音楽を作り続ける彼女を見て、いつか自分を壊さないだろうかと考える。

過去の俺が精神的自己犠牲だとするのなら、彼女のそれは肉体的自己犠牲といったところだろうか。

彼女を縛り付けているものはなんだろうか。そんな考えても分かるはずのないことに思考を回しながら、家事代行の人が用意したであろう冷蔵庫の食材を使って、奏の為に夜食を用意する。

本当なら、寝た方がいいと言うべきなのだろうが、集中している彼女に…、何かに縛り付けられている彼女に届く言葉は、恐らく俺ではかけられないだろう。

何も言わなくても分かり合える関係。そんなあるはずの無いものを本物と仮定して追い求めてきたが、そんなものはなかった。やはり人間は、言葉を交わさない限り、分かり合うことも…、分かりきった気になることも出来ないのだ。

しかし、今の俺では、たとえ言葉を交わしたとしても、決してわかった気になることすら出来ないと予感した。言葉を発した彼女の、憂い気な瞳を一目みて、それを悟ってしまった。

彼女は俺を救えても、俺は彼女を救えない。

俺はきっと彼女の救いにはなれない。精々彼女の身体に気を使うことしか出来やし

ないのだ。

悔しいと思うが、同時に仕方がないとも思う。過去の俺が誰も救えなかったように、今の俺にも、誰も救えるはずがない。

自分の中でその様に結論付けて、俺は特に何も声をかけることなく、歪んだ少女に夜食を運んだ。

第３話

　奏の家に居候してから早３日。最近、奏が夜にボイスチャットをしながら曲を作るようになった。グループ名は「２５時、ナイトコードで」と言うらしい。
　メンバーは４人で全員コードネーム。奏がＫで、あとはそれぞれ、雪、えななん、ａｍｉａと言うらしい。
　担当は奏が作曲、雪が作詞、えななんがサムネイル、ａｍｉａが動画、と言った感じらしい。
　まぁ、俺が関わることは無いだろうし特に気にしなくてもいいだろう。
　ここ最近の俺の生活としては、奏のご飯を作ったり、掃除したり、洗濯したり、株で稼いだりといった感じだ。
　買い物は奏が大量に買ってあった缶詰やカップ麺をアレンジしたり、家事代行サービスの人が置いていった食材を使っているので、俺の服を買いに行った一回きりだ。でも、そろそろ行かないと冷蔵庫が空になってしまうので、面倒くさいが、今日行くことに決めた。

「奏、ちょっと買い物に行ってくる。」
わかったという返事を聞いて、出かける準備をする。ちょうど準備を終えたところで、家のチャイムが鳴った。宅配便だと思って、宵崎と書かれたハンコを持って玄関を開けた。
しかし、そこに立っていたのは、宅配便の人ではなく、買い物袋を抱えた一人の少女だった。
「あ、あれ?・ここ、宵崎さんのお宅ですよね?・」
戸惑い気味に聞いてくる。そりゃそうだ。一人暮らしの知り合いであろう人の家から、知らない男が出てきたのだ。
「ああ、悪いな。俺は宵崎の家に居候させてもらってる、八幡だ。」
そう言うと、少女は納得したような表情をする。
「ああ、そうだった!・昨日から連絡貰ってたんですよ。居候の人が来たから家事は大丈夫だけど、アップルパイは食べたいとの事なのでお邪魔したんです。あっ、私は望月穂波と言います。」
なるほど、それで買い物袋には大量のリンゴが入っているのか。そして、聡い娘なのか、俺が苗字を言わなくてもスルーしてくれた。
「おお、そうか。なら、奏から許可貰ってるよな。入ってくれ。」

お邪魔しますといってぺこりと頭を下げ、家に入る。キョロキョロと家を見渡して、その他の家事の必要が無いことを確認して、キッチンに向かう。
「奏、望月さんが来てくれたぞ。」
「うん、今行く。」
そう言って奏が部屋から出てくる。奏はアップルパイが好物なのか？しかし、それだったら拾ってもらった日の買い物袋にアップルパイの１つぐらいは入っているものだろう。よくわからんな。
そんなことを考えながら待っていると、キッチンからいい匂いがしてきた。…そういや、今まで焼きたてのパイって食べたこと無かったな。作ったこともなかったし。
「さ、出来ましたよ～。」
望月さんの言葉と共に、アップルパイがリビングの机に置かれる。はっきり言って、圧巻だった。食レポなんてしたことがないので、気の利いた事は言えないが、すごく美味かった。これが食べられるのなら、他のアップルパイを食べようとは思わなくなるな…。
あっという間に食べ終わってしまったので食器をシンクに運ぶ。
食後に紅茶を３人分入れて二人がくつろいでいるリビングに運んだ。
「あ、ありがとうございます！」

「八幡はこう見えて結構気が利くからね。」

おい奏、こう見えてってなんだよ。俺なんて気づかいができすぎて誰にも話しかけないまであるぞ。

家でのんびりと茶を飲んでいる時間がこんなにも有意義だとは知らなかった。前の家では息つく暇もなくパシられたり勝手に休日に予定を入れられたりしたからな…。

しかし、望月さん、何か悩みでもあるのだろうか。今まで悪意に晒され続けてきたおかげで、人を見る目には多少自信がある。今の望月さんは何か悩みを抱えていそうな気がした。しかし所詮は他人。聞いたからと言って助けられる訳でもないし、そもそも他人に悩みを相談なんてしたくないだろう。そう結論づけて、静かなリビングでゆっくりとくつろぐ。

このままのんびりしていたいところだったが、望月さんが来る前に買い物に行こうとしていたことを思い出した。

「奏、忘れてたけど今から買い物行くから。」

奏はわかったと返す。

「あ、私もそろそろお暇しますね。」

望月さんももう帰るらしい。

「ああ、アップルパイごちそうさん。うまかったわ。」

「うん、また作りに来てね。」
　望月さんは了解です～と緩く返事をしてから帰っていった。
「それじゃあ、俺も行ってくる。」
　奏のいってらっしゃいを聞いてから家をでる。街で総武校生に出くわさないかと考えたが今は平日の二時なので、さぼりの奴でもいない限り出くわすことはないだろう。しかもここは東京だし。
　そう考えながら街を歩く。制服を着ていないし、腐った目のおかげで見た目の年齢はかなり上がっているので、周りからチラチラ見られるようなことはなかった。というよりも、俺と目を合わせたくないというのが正解だろうか。
　特に問題なく買い物を進めていく。セール中らしく、卵と野菜は他の主婦の方々と取り合いになったがここでも俺の目が役に立ち割とすんなりゲットできた。
　買い物を終えてスーパーを出る。思った以上に多く買ってしまって、かなり荷物がかさばっている。自転車を買うか、それとも１８歳まで待ってバイクの免許でも取るかどうかで悩んでいると、聞きたくない声が聞こえた。
「ひゃっはろ～、比企谷君！」
　魔王の降臨である。
「…どうしたんですか、雪ノ下さん。あと、俺はもう比企谷じゃ無いですよ。」

「今から少し時間あるかな?」
はっきり言って行きたくない。さっさと帰りたいし、ましてや魔王の相手なんてゴメンだ。
「すみません、今日はあれがアレなので無理です。」
「ゴメンね、ほんとに時間は取らせないから。」
いつもの軽薄な態度はどこにも無く、目の前には普段の魔王ではなく、雪ノ下家の長女が立っている。これではどうも断りにくい。
「…分かりました。この辺り、あまり詳しくないんで、どこか話せるところに案内して貰えますか?」
「うん、近くの喫茶店に行こうか。」
そう言って歩き出す雪ノ下さんの後ろに着いて歩く。
修学旅行の件を雪ノ下から聞いたのだろうか。しかし、雪ノ下のことを信じたのなら、喫茶店では無く俺を路地裏にでも突っ込んで投げ飛ばした事だろう。
しかしそうはせず、俺との会話を要求してきた。恐らく半信半疑なのであろう。雪ノ下さんはシスコンだが馬鹿ではない。恐らく雪ノ下の話に疑問を抱いたのだろう。俺をからかうのはやめて欲しいが、人の意見に流されず、自分で見たこと聞いたことを信じるという所はありがたいと思う。

どちらにせよ、少なくとも俺が話をするまでは潰されることは無いだろう。
そう結論づけて、いつの間にか着いていた喫茶店に足を踏み入れた。

第４話

喫茶店に入って店員さんに席に案内される。店内の隅の方で、近くを通りかからない限りは決して話の内容は聞こえないような場所だ。
コーヒーを二つ注文して、来るまではお互い無言だった。普段なら何かしらのちょっかいをかけてくるのだが、今日に関してはそれが一切ない。人の少ない店内で緩やかに流れるジャズが、少しの不安を掻き立てる。
「さ、それじゃあコーヒーも来たし、話してくれる？」
雪ノ下さんに催促されて、修学旅行で起こったことを話し始める。
戸部からの海老名さんに告白するけど振られたくないという依頼のこと。
由比ヶ浜が受注を反対していた雪ノ下を押し切りその依頼を受けてしまったこと。
海老名さんからの奉仕部の二人が気づけなかった遠回しな告白の阻止という依頼。
告白三十分前に葉山からグループを存続させて欲しいという依頼。
嘘告白という形で全ての依頼を達成したこと。
そして、雪ノ下と由比ヶ浜から拒絶され、由比ヶ浜から小町に、そして親に話が行き、

絶縁されたことを話した。
　雪ノ下さんは最初こそ無表情だったが、徐々に苛立ちが現れていった。そしていきなり立ち上がったかと思うと、俺に向かって思い切り頭を下げた。
「ごめんなさい、八幡君！家の愚妹がご迷惑をお掛けしました！」
　少し驚いたのだが、同時に納得もした。これが事実であろうとなかろうと俺がどこかでリークすれば雪ノ下家はマスコミに追われ、下手をすれば失墜するかもしれない。事実だったのならばそれは確実となるだろう。だから謝罪しているのだと思った。だが、そんなことで彼女が謝罪しているのではなかった。彼女の目を見てわかった。
　曰く、俺の事を心から心配してくれているらしい。目の前で起きた事だけを信じ、何故そうしたのかを考えなかった愚かな妹を呪ったらしい。家族を信じず、知り合いを信じた俺の元家族に怒りを持ってくれているらしい。
　きっとこれからも、彼女のことを苦手だとは思うが、これまでのように遠ざけないようにはしようと思った。彼女の行動や目には、人間不信になりかけていた俺を信じさせるぐらいのものだった。
「頭を上げてください。」
　そう言うと、雪ノ下さんは顔を上げた。
「俺はあなたの事を恨んではいませんし、家を追い出されたことも、どうせ遅かれ早かれ

だったので。文化祭のこともあったので学校でも居心地が悪かったですし。」
「…でも、文化祭の件なんて私が主犯みたいなものだし…」
「あれは、雪ノ下を成長させようとしたんでしょう? 何でも一人でこなそうとする雪ノ下に、頼ることの大切さを教えるために。」
　そう言うと、雪ノ下さんは苦笑した。
「何でも分かっちゃうんだね、八幡君は。」
「なんでもってわけじゃないですよ。分かるのは分かっていることだけです。」
　そう言うと、今度は淡い笑みを浮かべる。
「ふふっ、八幡らしいね。」
　そうですか。と返す。初めて出会った頃の強化外骨格は、もはや見る影もなかった。
「それと、八幡君にはお詫びの品を用意するから。」
「いや、それは大丈夫です。」
　と返すと雪ノ下さんは食い下がる。
「でも、雪ノ下家からすればお詫びの品を渡さないと気が済まないわけ。それに、口止めもしてもらわないとね。」
　なるほど、そういうことなら受け取らざるを得ない。しかし、住む場所は一応あるし、欲しいものも特にない。何を頼もうか。…そうだ。

「なら、俺に音楽を教えてくれませんか？」

と言うと、雪ノ下さんはキョトンとした。

「それは予想外だね。別に構わないけど、どうして？」

「同居人が音楽を作っていて。それで俺も話が分かるようになりたいので。」

その返答に、彼女は少し驚いたあとそっかと答えた。

「てっきり私は住むところがないから住居が欲しいって言うと思ったんだけどね。」

雪ノ下さんがそう思うのも無理はない。自分はぼっちで、今までの依頼もほとんど一人でこなしてきた。そんな俺に同居人がいるというのだ。

「まぁ、無条件という訳では無いですしね…。泊めてもらう代わりに家事を全てやるという感じです。専業主夫を目指していたから家事には自信あるので。」

そう言うと、雪ノ下さんはそっかと返した。

「わかった！それなら八幡君に音楽のイロハを作詞作曲から歌に楽器まで手取り足取り教えちゃうよ！けど、私は大学があるから講義のない時間でもいいかな？」

俺はもう学生でもないので時間は十分にある。

「ありがとうございます。雪ノ下さん。」

「気にしないで、これはお詫びなんだから。それと、お礼かな？私個人の。」

「お礼…ですか？」

そう訪ねると雪ノ下さんはうなづいた。

「うん、私って結構自由にやってるように見えただろうけど、ちょっと前まで本当に自由にやる時間も無かったの。そんな中で八幡君と出会って、君の捻くれているけどそんな中に相手を思いやってくれる優しさがあって。私、君といる時間に本当に救われてたんだ…。」

これには相当驚いた。俺が雪ノ下さんを救っていた?そんな馬鹿なことがあるはずがない。俺は誰も救ってなんか無い。これからも救えることなんて無い。今までがそうだったのだから…。

「俺は、雪ノ下さんを救ってなんかいませんよ…。貴方が勝手に救われたと思っているだけです…。」

「それって救っている内に入ってると思うんだけどな。」

俺はキョトンとしてしまった。

「だって、君が救った気になんかなっていなくたって、相手が救われたと思ったのなら、それは救った内に入るんじゃない?それに、よくある話だと思うよ。自分では気づいていないだけでいつの間にか誰かを助けているのって。」

目から鱗だった。そっか…、俺は誰かの助けになれていたのか…。俺自身が気づいていなかっただけで。そう考えて少しだけ俯いた。こんな顔を見られたくは無かったか

ら。

残り半分程となったコーヒーに、たった一度だけ、小さな波紋が浮かんだ。

第5話

　喫茶店から出たあと、雪ノ下さんに連れられて携帯ショップに言った後、スタジオに来た。前の携帯は既に解約されていたので、雪ノ下さんに買ってもらった。もちろん抗議したが、携帯はお詫び、音楽はお礼という事で押し切られてしまった。
　スタジオは何でも楽器が一通り揃っているらしく、初心者にはピッタリの場所らしい。しかも自販機にはマッ缶もある。
「さ、それじゃあ早速基礎からおぼえようか！」
　手始めにピアノとギターの基礎から習う。ピアノの楽譜の読み方などはある程度小中学校で習っているため割とすんなり覚えられたが、ギターの楽譜は見たこと無かったので少々手間取ったが、1時間ぐらいかけて音楽記号まで何とか全て覚えることが出来た。
　そんな感じで授業を受けていると、あっという間に夕方になってしまった。
「今日はありがとうございました。」
「うん！だけど八幡君、覚えるの結構早いね？驚いちゃったよ！」

　他の人がどれだけかかるのかは分からないが、かなり早いらしい。
「明日は講義があるから、次は明後日ね！」
　分かりましたと返して、スタジオから去る雪ノ下さんを見送る。
　完全に背中が見えなくなった後、少し飲み物を買おうと思ってスタジオ内の自販機に向かう途中、テーブル席に望月さんが座っているのが見えた。俯いていて表情は分からないが、何か嫌なことでもあったのだろうかと思って、たまたま自販機に並んでいたマッ缶を2本買って望月の座っている席に近づく。
「相席、いいか？」
　望月さんは驚いた様だが、直ぐに落ち着いてどうぞと着席を促してくれた。はっきり言って、今回の行動は個人的には怖かった。
　雪ノ下さんには救われたと言って貰えたけど、それは無意識のうちに…、それも何気に避けていたにも関わらずだ。それに対して今回は自発的に相手に近づき、傲慢なことに自分の手で救おうとしているのだ。それも今日会ったばかりの相手をだ。
　怖い。誰とも関わりたくない。出来るなら一人で生きていきたい。でも…
　こんな俺でも誰かを救うことが出来るかもしれない。
　そう知ってしまった。そう知ってしまったから、今俺は心のどこかで天狗になっているのかもしれない。舞い上がっているのかもしれない。傲慢になっているのかもしれ

ない。自覚している。でも…
目の前に途方もなく悩んで、落ち込んでいる他人（知り合い）を放っておきたくない。
俺が救える可能性なんて、きっと小数点以下だろう。でも、ゼロじゃないと知った。
俺じゃなくてもいつか望月さんは誰かが救ってくれるだろう。誰かではなく時間が解決してくれるかもしれない。
でも、それが…、その誰かが俺でもいいんじゃないかと思ってしまった。
らしくない。他人の一言で変わってしまうなんて俺らしくない。かつて、俺は自分が好きだと言った。変わらない俺の事を。何もせず、ただ本物だけを求め続けていた傲慢な俺のことが。
だけど、今の俺は今の俺自身のことが…、誰かを救いたいと思う傲慢な俺が好きだ。
ここで、過去の俺とは決別しよう。これからはただ待つんじゃない。俺自身の手で、本物を掴み取りに行くんだ。
「急にごめんな、望月さん。」
そう声をかけてＭＡＸコーヒーを渡す。
「あっ、ありがとうございます。」
受け取ってはくれたがプルタブを開けようとはしない。彼女の顔は今日奏の家に来た時の６割増で暗かった。

「なにか、あったのか？」
　単刀直入にそう聞くと、望月さんは少し驚いたような顔でこちらを見た。そして、ポツポツと喋り始めた。
　曰く、かつて、仲のいい幼なじみが３人いたらしい。毎日のように一緒に遊んだり、バンドを組んだり楽しい毎日を過ごしていたらしい。
　しかし、幼なじみの１人が入院してしまってから、その関係はガラッと変わってしまったらしい。
　二人は何とか関係を修復したいと話しているが、もう１人は３人を避けているような感じで、望月さんはどうしてももう１人が気になってしまって本当の思いを言えずにいるらしい。
「こんな感じかな…。ゴメンね？普段ならこんなこと言わないんだけど、やっぱり私も参っているみたい…。」
　望月さんは、きっと強い女の子なんだろう。誰かを気遣って本音をひた隠し、普段なら悩みがあっても決して誰かに打ち明けたりはしないような人間なのだろう。
　それでも、今日会ったばかりの俺にこんな事を話すなんて、恐らくもう限界なのだろう。
「…これは俺の友達の友達の話なんだがな？」

奉仕部にいた時から、俺の黒歴史を語る時はいつもこの言い回しを使っている。

「かつてソイツは本物を求めていたんだ。たとえ言葉を交わさなくても…、目を合わせなくても分かり合える関係をな。」

望月さんは黙って俺の話を聞いてくれている。

「でも、ソイツは何時しかそんな関係なんて存在しないと悟ってしまったんだ。そいつはいつだってボッチだったからな。本物どころか、普通の関係すら築けなかったんだ。」

「だけど、高校2年のある時、部活に入れられて人と関わる機会ができたんだ。ソイツと部員は軽口を叩き合う関係で、ソイツはそんな時間を大切に思っていたんだ。そして、勘違いしてしまった。こいつとなら本物の関係を築けるかもしれない、とな。」

「しかし、そんなことは有り得なくて、今ではお互いに憎み合うようになってしまった。ソイツは本物を求めるあまり、自分の考えを…、自分の気持ちを伝えることを疎かにしてしまった。その結果だ。」

望月さんは先程よりも少し俯いているが、耳を傾けてくれている。

「で、俺が言いたいのは、自分の気持ちを伝えないと、いつか必ず後悔するってことだ。」

そう言うと、望月さんは顔をガッと上げた。何か、大切なことに気づき始めたように。

「相手とどんなに親しい関係だったとしても、考えを相手に伝えない限りは決して伝わらない。最悪の場合、ねじれ曲がって相手に届く事だってある。だから…」

　俺は、自分のかつての高校生活を思い返しながら言葉を紡ぐ。
「失ってしまう前に…、後悔してしまう前に、自分の思いを相手にぶつけるべきだ。それに、人間ってのは不思議なもんでな。関係の修復は不可能でも、ゼロから始めることは不可能では無いんだよ。」
　彼が過去を伝え終わったと同時に、望月さんは涙を流しながら顔を上げ、１人の少女が近くの席からガタリと音を立てて立ち上がり、二人の少女はただ口を結んで望月ともう１人の少女を心配そうに見ていた。
「そっか…。そう、ですよね。うん、私、もう自分を偽るのはやめます。今はただ…、この想いをあの子たちに伝えたい！」
　望月さんがそう高らかに宣言したと同時に、三人の少女は望月さんに抱きついた。
「みんな…、あのね、私、伝えたいことがあるの！」
　そんな彼女を見て、彼はそっと席を立ちスタジオを立ち去った。もう、心配は要らないだろうと。
「私も…。今まで言えなかったけど、どうしても言いたい事があるの…！」
　ただ後ろだけを見ていた…、誰かに気を使いすぎるあまり自分を見失った一人の少女が。
　どうしても素直になれず、もう一度今までのように友達と話したかったが冷たくあし

らってしまった少女が。

もう一度、今までのように仲良くするために自分の思いを伝え続けた二人の少女が。

今までずっと離れ離れだった四筋の流星が、今やっと寄り添い合い、流星群の輝きを取り戻した。

彼にお礼を言おうとした少女は、今やっと彼が居ないことに気が付き、手元に残った一本の缶コーヒーを胸に抱いた。

第６話

　奏の家に帰ってきて手を洗って買ったものを冷蔵庫に入れてから布団に潜り込む。今日は本当に色々なことがあった。雪ノ下さんに音楽を教えてもらったり、望月さんに自分の黒歴史を使って彼女たちのギクシャクしていた関係をリセットすることが出来た。
　望月さんの件は、最初こそ怖かったものの、それでも行動に移して良かったと思った。報酬として、彼女とその幼なじみの少女たちの曇りのない、本物の笑顔を見ることが出来たのだから。
　そんなことをしばらく考えていると時計の短針は既に六を刺していた。
　時間が過ぎるのはあっという間だなと思いつつ布団から出てキッチンに向かう。
　今日買ってきた食材を冷蔵庫から取り出し調理を始める。
　三十分程して完成したのでリビングに奏を呼んで食べ始める。その間二人の間に会話は無い。彼女は基本音楽にしか興味はなく、そして俺は現状その事にあまり詳しくない。いずれ話せる日が来るだろうかと思いつつ食べ進める。

食べ終わったあと、奏はそのまま自室に入っていく。
あ、そうだ。
「奏、俺が借りてる部屋にある楽器、使っていいか?」
借りている部屋は防音室で、楽器も沢山揃っていた。
雪ノ下さんに楽器も習う予定ではあるが、覚えるだけの音楽記号とは違い演奏は練習量がものを言う。
「楽器?いいけど、急にどうしたの?」
「いや、奏が音楽を作ってるから、俺も気になってな。それにうちに来る条件に音楽の感想を言うこと、とか言ってただろ?だから楽器だけじゃなくて音楽全般勉強する予定なんだよ。」
そう言うと、無表情なのは変わらないが、ほんの少しだけ弾んだ口調で構わないと言った。
ありがとうと返して奏が自室に入っていったあと、俺は自分と奏の食べた皿をシンクに運んで洗う。そして終わったらすぐに風呂に入る。奏の風呂の時間は決まっていないから早めに済ませておく必要がある。
さっさとシャワーだけ浴びて俺も自室に籠る。
一番取っ付きやすいのはキーボードだろうか。最近のキーボードにはシンセサイザ

機能など、かなり複雑なものもあるらしい。ピアノとは少し取手が違うのは初心者にも分かるだろう。しかしギターは弦の位置を覚えきれていないし、ドラム、ベースに関してはまだ習ってすらいない。やっぱりキーボードにしておくかと思い、キーボードの電源をつける。

「…あれ?」

キーボードに触れると、不思議に感じた。初めて触れるはずなのに、妙に鍵盤が指に馴染むのだ。まるでここにいない誰かが、俺を導いてくれるように。

しかし、始めたばかりでは指がプロのように動くはずもないので止まり止まりにはなってしまったが、お気に入りの曲を引ききることが出来た。

「…あれ?」

本日二回目のあれ?である。お気に入りの曲で、何百回聞いたか分からないが、初めてでこんなにも上手く引けるものなのだろうか。楽譜、用意してないのに。

だがしかし、慢心は決してしない。上手くいったからと言って調子に乗るのは良くない。自分の考えには多少の傲慢さは仕方がないかもしれないが、行動に関しては別だ。考えるのをやめてはいけない。努力を怠ってはいけない。

考えることをやめた瞬間、きっと俺の糸は切れてしまう。今までずっと上手くいかないことばかりで、それをどうするかを考えて生きてきたから。だから、考えるのをやめ

てたら、きっと俺は俺じゃなくなる。

勘に頼るな、考えろ。俺の取り柄は思考だけ。どうして上手くいかなかったのか、どうすればもっと良くなるのか。練習量は?方法は?どう演奏すれば人の心に響く?考えるべきことを挙げればキリが無い。

だからこそ、俺が俺で居られるのかもしれない。奉仕部の時も、追い出された時も、今も。思えばずっと何かしらを考えて来た。依頼をどう解決するのか、どうやってこれから生きていくのか、そして…、どうやって人を救うのか。

そんな思考の波に飲まれていた時に、さっき初めてキーボードに触れた時の感覚を、今度は自分の胸に感じた。まるで…

音楽は思考だけが全てでは無いと諭すように。

どういうことか、妙に納得出来た。俺の理性は考え続けろと訴える。しかしそれ以上に、さっき導いてくれた何かの言霊が…、俺の感性が、理性を上回った。

俺の感性を信じていいのか?

そう自問自答した時、不思議と胸が暖かくなった気がした。そして俺の理性も、呆れたのか、はたまた俺の感性を信じてくれたのか、訴えることを止めた。

これでいいのか…。ありがとう、顔も名前も知らない隣人さん。俺の胸がさっきよりも暖かくなった。

その後は時間を忘れるぐらい演奏を続けていた。
キーボードの時と言い、先程と言い、やはり俺の感覚は間違ってはいなかった。
ある時、それは楽器を使う時の指の動かし方を教えてくれた。
ある時、それはある程度できるようになった俺に付いた癖を指摘してくれた。
ある時、それは歌を教えてくれた。
そしていつの間にか教えてもらった歌のイロハをマスターし、ここにある全ての楽器をマスターした時、最期にそれ（師）は俺に指示した。
今教えたことを忘れてもいいから、今までの短いようで長い人生の、心で感じたことを全て音に乗せろと。
そう言われた時、不思議と今までの出来事がまるでフィルムのように詳細に浮かんできた。
親に構って貰えた幼稚園に入るまでの短い間のこと。
小町が生まれてからのこと。
虐められ始めた小学生の時のこと。
中学生の時に勘違いして女子に告白したこと。
犬を庇って車に轢かれたこと。
奉仕部に入部してからのこと。

可憐な姿を持つ男子から来たテニスの依頼のこと。
コートを着た厨二病から来た遊戯部の依頼のこと。
家族思いの女子にスカラシップをすすめたこと。
クラスのイケメンに唆された女子が破綻させかけた文化祭のこと。
修学旅行で依頼に挟まれ学校中から嫌われ、家族にも絶縁を言い渡されたこと。
その日の夜道に、人を救うことを義務のように思っている歪んだ少女に出会ったこと。
外骨格の外れた女性に、救ってくれてありがとうと言われたこと。
他人想いな少女と、その幼なじみの子たちの本物を見たこと。
そして今、いつの間にか楽器を手に取り全ての感情を込めて歌い（叫び）、演奏している（訴えている）こと。
頭の中には様々な感情が渦巻いているのに、不思議と思考の海は澄み渡っていた。
５分？１０分？１時間？時間の感覚が無くなったので正確な時間は分からなかったが、凄くスッキリした。心のどこかにかかっていた靄が無くなったようだ。
それと同時に、キーボードに触れた時に感じた魂は今やどこにも感じ取ることが出来なかった。ただ一つだけ、俺に想いを残して。
「はち…まん？」
ドアの方を見ると、驚いた顔でこちらを見つめる少女がいた。

〝あの娘を頼む〟

第7話

俺は今まで、魂というものを信じてこなかった。存在する根拠も証拠も無いからだ。
しかし、今日の体験を持ってその考えは覆った。今日、俺は想（師）いに託されたのだ。
今こそ、彼女と向き合う時だ。
かつての俺は考えた上の結論だけを信じてきた。考えただけで、自分の気持ちは無視してきたのだ。合理性だけを求めて。
文化祭では効率を重視して俺がヒールとなって、機能が停止しかけていた文実を再稼働させた。最期になって逃げ出し駄々を捏ねた委員長を罵倒し、最後の発表に間に合わせた。
修学旅行では、相反する三つの依頼を、最も合理的で、それでいて最も最低なやり方で解決した。
でも、ここに来てから俺は変わった。
ここに来た頃は今まで通りだった。
だけど、卑屈に物事を捉えていた俺を雪ノ下さんの一言で少し前向きになれた。

だけど、四人の少女の屈託のない笑顔が俺の凍った心を少しだけ溶かしてくれた。
だけど、考えてばかりの…、理性しかない俺を魂（師）はそれだけじゃないと教えてくれた。
来たばかりの俺は逃げてばかりだった。
目の前の歪んだ少女を見て、俺では救えないと見切りをつけて早々に諦めた。
家事代行の少女の曇った顔を見て、俺が関わるべきことではないと見捨てた。
救いたいと叫ぶ俺の感情を無視して。
だからこそ、今俺は俺自身に応えるためにも…、想いに応えるためにも、俺は必ず奏を救う。

「凄いね、八幡…。私には、そんな音楽…、人の心に響くような音楽、作れないよ…。」

奏は相当に参っているらしい。しかし、そんなことは決してない。俺はこの家に来てから毎晩奏の作った音楽を聞いた。それこそ、たった三日であれど、何十回、何百回と。そしてその度に少しずつ失っていた感情が戻ってきていたのだ。

奏の音楽がなければ雪ノ下さんの気持ちも、望月さんの笑顔も、師の教えも、全てを受け入れられなかったかもしれない。

今の俺を導いてくれた人たちの想いも、俺の凍てついた心を溶かしてくれたからこそ、今の俺の糧となっているのだ。そんな奏に…、そんなことは言って欲しくない。だからこそ、俺はいつものように語りかける。

「これは、俺の友達の友達の話なんだけどな?」
望月さんに語りかける時にも使った、俺の黒歴史を語る為の出だし。
「曰くそいつは、人を救いたいと…、人を幸せにしたいと思う少年だったんだ。」
「だけどそいつはどこまでも冷静で、合理的だった。だから、効率的に人を救うために…、効率的に幸せにするために、自分を犠牲にするような奴だったんだ。」
「だけど、そのやり方が悪くて、救いたかったはずの人たちに…、幸せにしたかった人たちに軽蔑されてしまったんだ。」
「そこでそいつは悟った。俺では人を救えないってな。」
「だけど、そいつは一曲の音楽に出会った。そいつは過去に関わった一人の女性に出会った。そいつは一人の少女の本物の笑顔を見た。そいつは暖かい心に出会った。」
「音楽はそいつの心をゆっくりと溶かした。女性はそいつに救ってくれてありがとうと言った。少女の笑顔はそいつに希望をもたらした。心はそいつに自分の想いの大切さを説いた。」
「そして、そいつはそんな俺でも人を救うことが…、人を幸せにすることが出来ると分かったんだ。」
語ると、奏は俯いて、黙って聴いている。ただ、少しだけ震えているのがわかる。
「でも…!その人がそうだっただけで、私はそうじゃない!私が…、お父さんを…!お父

さんから音楽を奪ったから！」
奏は激情に身を任せ、絞り出すように言葉を放つ。
「彼の恩人はこう言った。人は知らず知らずのうちに必ず誰かを救っていると。」
奏は顔を上げてこちらを見る。涙を堪えた目で。
「そして、彼の尊敬する人は彼に今日音楽を教え、そして、彼に奏を頼むと娘を託した。」
すると奏は俺に問うた。
「お父さんに、会ったの？」
これで俺の話だと気づいたようだ。
「ああ、俺の師匠だ。俺を導いてくれた。そして消える前に、お前を頼むって言われたよ。どこにいても娘を思ってくれる、…良い親を持ったな。」
奏は泣き崩れてしまった。
私にもどこかの誰かを救えていると、幸せに出来ていると知った。
自分が音楽を奪い眠ったままの父が、私のことを想っていてくれた。
泣き崩れてしまう理由はそれだけで充分だった。
彼は、彼女が泣き止むまで彼女の背中をさすり続けた。
奏の涙が止まった後、俺に少し待っていてと言い部屋を出た。戻ってきた奏が持っていたのは、オルゴールだった。

「これね、お父さんが作ってくれたオルゴール。子供の頃に作ってくれて、聴くと幸せになれたんだ。」

そう言ってオルゴールを鳴らす。その音は静かで、儚くて、聴いていて不思議と心が暖かくなった。

「…すげぇな、お前の親父さん。本当に心が暖かくなった。」

俺も、出来るならこんな親父が欲しかったなぁ…。

奏は自慢げに胸を張る。

「今すぐには無理だが…、これからゆっくり幸せになれる音楽を作っていこうぜ。」

という言葉に、奏はうんとうなづいた。

この日、自身の過去に縛られた少女は、今やっと自身の未来をそっと見据えたのだった。

第8話

俺は今、現実では見たことの無い、周りに転がっているものから空までが、真っ白で、ただ虚無が広がっているだけの場所にいた。
「どこだ？ここ。」
「ここは、セカイだよ。」
先程見渡した時には誰もいなかったが、後ろから返事が帰ってきた。

奏と腹を割って話した次の日、晴れて俺もニーゴのメンバーに伴奏担当として入ることが出来た。基本的にみんなが作業してる最中は練習で、音を合わせて欲しいと頼まれた時に伴奏を入れるという形だ。雪、えななん、ａｍｉａも快く迎え入れてくれてほっとしている。ちなみにナイトコードではアハトと名乗っている。意味としてはドイツ語の八だ。
「アハト、ここのリズムを確かめたいからドラム叩いてくれる？」
了解だと返して楽譜に合わせてドラムを叩く。叩き終わると少し違うかな、と言って

また作業に戻る。

『ところでさ、アハトって結構ドラム上手いけどいつから始めたの？』

「あん？ 昨日からだが…。」

そう返すと奏以外の素っ頓狂な声が聞こえて、顔を見なくても酷く驚いている様子が伺えた。

『嘘でしょ!? 普通楽器って年単位でかかると思ってたんだけど！』

と言うえななんの声がスピーカー越しに聞こえた。

「まぁ、素晴らしい師匠がついてくれてたからな。俺自身の才能じゃねぇよ。」

コンマ一秒だけ会話が止まる。普通なら違和感を覚えることもないだろうが、俺にはどこか引っかかった。

「そっか。でもいくらすごい師匠がついてたって、才能がなきゃ一日でマスターはさすがに無理だよ。」

と雪も言う。

「まぁ、確かにな。そんな才能をいち早く見つけられた俺はラッキーだったたって事だな。」

と返す。

そもそも俺は誰しもがどんな才能でも持っていると思っている。ただそれが安易に

見つけられるか、いつまで経っても見つけられないかの差だと思っている。
「それじゃあ、私は明日学校だから落ちるね。」
「そうか、この中で全日制に毎日通ってるのって雪だけだもんな。」
ニーゴのメンバーは俺以外全員高校生だが、奏は通信制、えななんは夜間定時制、ａｍｉａは不登校ぎみということで、雪だけいつも早めに寝るようになっている。
「うん、それじゃあみんな、おやすみ。」
そう言ってナイトコードからログアウトした。
「それじゃ、俺も眠いからそろそろ寝るわ。」
おやすみという声を聞き届けてからスマホのナイトコードを切る。そしてホーム画面を見ると、見覚えのないアプリが一つだけあった。
「ｕｎｔｉｔｌｅｄ？」
入れた覚えもなかったので消そうとすると、次の瞬間、勝手にそのアプリが起動された。

「セカイ？」
「うん、ここは、あの娘の想いで出来たセカイ。」
想いで出来たセカイ？あの娘？まだ分からないことが多すぎる。

「まず、お前は誰だ?」
目の前の白髪ツインテールでオッドアイの少女に問う。
「私は、ミク。あの娘の想いから生まれた存在。」
想い、ね。どうやらこのワードがかなり重要になってくるらしい。想いとはおそらく、こうなりたいという心の表れだと推測する。
つまり、
「このセカイの持ち主は、このセカイのように真っ白に…、つまり、消えてなくなりたい、ってことか?」
ミクは抑揚もなくそうだと答える。
「それで?なんで俺をここに呼んだんだ?」
「八幡にしか、あの娘を救えないの。だから、救ってあげて欲しい。時間がなくなる前に。」
ここでも「救う」という単語が出てくるのか。
「手の届く範囲で救える人は救うと決めたんだ。俺に出来るなら、俺にしか出来ないと言うのなら、やってやる。だけどその前に聞きたい。これだけは聞いとかないといけない。」
「ミクの言う、あの娘って誰だ?」

「八幡たちが呼ぶ、雪。朝比奈まふゆ、だよ。」
そうか。だから彼女の作る歌詞は、どこまでも歪で、後ろ向きで。だけど自分の芯が通っていて、美しかったのか。
売れたいという歌詞では無い。相手に届けたいと言う歌詞でもない。ただ、自分の想いを乗せた歌詞。だからこそ、そう思えたのだろうか。
「…まだ実際にあった訳では無いし、雪の事情も分からない。だから、必ず救うとは、悪いが言えない。だが、そう出来るように善処する。」
「ありがとう、八幡。」
その声を聞いた後、俺は自分の部屋に戻ってきていた。
救う、か。かつて俺は、救うことは傲慢だと言った。それが今や、その傲慢を自分が現実であったこともない相手に対して為そうとしている。本当、人ってどう変化するか分からないものだ。
そんなことを考えながら、短針が五を指したと同時に布団へと潜った。

第9話

目を覚ますと、時刻は既に午前十時だった。全く眠った気がしないくらい眠いが、まだ奏に朝ごはんを作っていないので渋々布団から出る。
消えたい、か。小中の時は思い出すだけで恥ずか死にたくなる、存在ごと消えてしまいたくなる黒歴史は沢山あるが、奉仕部の二人に拒絶された時、元家族に勘当を言い渡されたときは、不思議と死にたいとも消えてしまいたいとも思わなかった。生きるためにこれからどうするかを考えていた。だから彼女の…、雪の気持ちは俺には分からない。
彼女のセカイは…、想いは何も写してなんて居なかった。ただただ虚無が広がっているだけ。はたして俺に彼女を救うことは出来るのだろうか。
思考の海に耽っているうちにパンが焼けたので、奏をリビングに呼んで食べ始める。奏も寝ていたらしく、まだ髪もボサボサだ。
パンを咥えながらネットでニュースを見る。その中には、なんと総武高校の事も載っていた。
【全国有数の進学校でいじめ発覚!?】

というありがちな見出しだ。内容としては、文実実行委員のほぼ皆勤で、学校の評判を守り抜いた生徒をサボり扱いし、修学旅行でもひとつのグループを守るために汚れ役を着せて、その上その件で家族に絶縁されるというものだった。

俺にとってはもう関係の無い事だと他のニュースも見ていると、雪ノ下さんから電話がかかってきた。

「はい、もしもし。」

『あ、もしもし八幡君?今朝のニュースは見た?』

「ええ、見ましたよ。雪ノ下さんがやったんですか?」

『いや、私じゃないよ。戸塚君と川崎さんと材木座君、それと隼人のやつが全てぶちまけたんだって。』

葉山が?戸塚、川崎、材木座はともかく、個人よりも全体を守るあいつがそんなことをするとは思えなかった。

『私も隼人がそんな事するとは思えないから呼び出して聞いたんだけどさ、こう言ってたよ。』

『修学旅行が終わってからの学校で、もう比企谷の噂が悪い方向で広がっててさ…。言いふらしたのは大和と大岡だろうし、戸部と海老名も助けてくれた比企谷の事を平然とバカにしてたんだ。ここでようやく、僕が依頼する前に言っていた比企谷が言ってた事

の意味がわかったよ。所詮そんなグループ、ただの欺瞞だってね。彼が守ってくれたけど、そんな彼をバカにする連中とは、どうしても上手くやっていけそうに無かったし、そもそもそんな奴らと仲良くもしたくないからね。だから、俺も家族との絶縁覚悟でマスコミにリークしたんだ。これで総武高校もその生徒も…、雪ノ下家も失墜さ。みんな仲良くなんて不可能だって、ここでようやく気がついたよ…。』

まさかあの葉山がそんなことを言うとは思いもよらなかった。

「それで、雪ノ下さんは今どうしてるんですか？」

『雪ノ下家の次女がそんなことをやらかしてるなんて分かった途端にマスコミが即座に駆けつけてね…。今はその対応で必死だよ。ほんとに隼人の奴…。でも、あいつも成長したかもね。』

「…そうですね。ちょっと前まではみんな仲良くが口癖でしたからね。ちなみに、今葉山たちはどうしてるんです？」

「今はいじめが発覚したからリークした張本人ということで警察に事情聴取を受けてるよ。その他の生徒たちもね。」

どうやら葉山は本当に成長したらしい。周りに合わせることしかできなかった人間が、この時、力関係の大小を問わず、正しい人間を庇護できる人間になったのだ。

それに、戸塚、川崎、材木座。アイツらも学校中の噂を信じず、俺を信じてくれたら

しい。俺にも味方はいたんだなと思うと胸に温かさが染みる。
「…そうですか。あいつらには、礼を言わないと行けませんね。」
『そうだね。どの道隼人がやらなくても私がこうしてたしね。手間が省けたし、お礼はしないとね。まぁ、これから暫くは全員忙しいから、もうしばらく後になっちゃうけどね。』
「分かりました。それじゃあ片がついたら連絡ください。」
『はいはーい。じゃあね。』
そう聞こえた後に通話が切れる。
「なにかいい事でもあったの?」
と奏が聞いてくる。
「ああ。今日、素晴らしい事があったんだ。」
「そっか。それは良かったね。」
たったこれだけの会話だったが、それさえも幸せに思えてくる。また少し、心の氷が溶けていった気がした。
不思議なものだ。少し前までは、一人でいることが何よりも有意義な時間だったはずなのに、今では奏といる時間が有意義だと思っている。戸塚や川崎、ついでに材木座に葉山にも会いたいとも思っている。ここから俺は本物を得ることが出来るのだろうか。

いや、掴んでみせる。俺の事を心から思ってくれている友達がいる。俺を救いたいと言ってくれる少女がいる。あとは、俺だ。俺が本当に心を開くことができるなら…、きっと彼らと、そして奏と。もしかしたら、もっとたくさんの人達と、本物を掴めるかもしれない。

世界は俺一人じゃない。きっと誰かが見ていてくれる。

そう結論づけて、俺はまだあったことも無い少女を救う方法を考え始めた。

総武ｓｉｄｅ

戸塚・川崎・材木座・葉山

「ハポン！相棒の今までの事をマスコミにリークしただけでまさかここまでの騒ぎになるとはな！まぁ、これも当然の報いというものであろう！」

と、材木座は言う。本当にその通りだ。全国有数の進学校でいじめが発覚したのだ。しかもそこに雪ノ下家の次女が絡んでいるとなればマスコミが食いつかないわけが無いのだ。

「そうだね…。でもまさか比企谷のやつ、修学旅行から帰ってきた次の日からもう退学したなんてね…。」

比企谷が退学したことは、修学旅行翌日に彼の家族から絶縁された事と同時に伝えら

れた。本来ならば退学の事だけ伝えられるのだろうが、どうやら担任も比企谷の事をよく思っていなかったらしい。
それに、周りも周りだ。それを聞いて優美子以外のやつは平然と笑っていた。俺は今まで、こんなヤツらと仲良くしようなんてほざいていたのかと思うと、自分のことが恥ずかしくなる。
「本当に、八幡の事をバカにしていた人たちもどんよりしちゃったよね。ま、当然だけどさ。」
比企谷が退学してから、戸塚の発言の所々でダークな一面が見られるようになった。まぁ、友達がそんな目にあってしまったのだから無理もないだろう。
「そうだね。俺もこれからは雪ノ下家のこともあるし、暫くは学校に来れないし、下手したら父さんの仕事も無くなって、もう学校に来られないかもしれない。」
「そっか…、少し寂しくなっちゃうね。でも、葉山君っていい意味で変わったよね！」
「うむ！テニスの時といい、修学旅行の以来の時といい、その時は周りの意見だけを尊重し、いざとなったら他人任せにする野郎だったたのにな！」
「俺は今までそんな風に思われていたのかい…。」
「まぁ、それは当然でしょ。でも、あんたがこのことを手伝ってくれるなんて思ってもみなかったし、本当に変わったと思うよ。」

と話していると、俺の携帯に着信が来た。陽乃さんからだ。
『ひゃっはろ～!隼人、随分とエライ事をやらかしてくれたね!おかげでこっちはマスコミの対応からその他諸々とんでもない激務に追われてるぞ!』
「すまないな、陽乃さん。でも、比企谷…、いや、今は八幡か。彼が文化祭を、そして俺のグループを守ってくれたのにぁの仕打ちっていうのはどうしても納得出来なかったんだ。だから、親から絶縁されるのも、学校を辞めて働くことも、陽乃さんに思い切り殴られることも覚悟してるよ。」
というと、陽乃さんは今まで聞いたことの無いぐらい優しい声音で話し出す。
『そんな事しないよ。隼人たちがやらなくてもきっと私がやっただろうからね。まぁ、私だったらもっと派手にするけどね!今の家も、雪乃ちゃんも、面白くなくなっちゃったんだもん。』
どうやら今の彼女にとっては、雪乃ちゃんも最早どうでもいい存在らしい。
『忙しいからそろそろ切るけど、最後に一つだけ。あんた、やっと男らしくなったね。』
陽乃さんからそんなことを言われるのは初めての事だったので、思わず涙してしまった。今まで認められたかった憧れに、今やっとこのような形で少しだけ認めて貰えたのだ。
三人の仲間に囲まれながら、成し遂げた男は歓喜の証を、そして、救ってもらった相

手を守れなかった悔しさの証を地面にしかと叩きつけた。

第１０話

トーストを食べ終えて、食器を洗った後、着替えて買い物に向かう。今日は世間一般に言う休日で、渋谷には人がごった返していた。
今は１１月で段々と寒くなってきたため、冬物の野菜が安くなってきていた。苦手なトマトは生憎夏野菜のためいつもより高かった。
持ち前の目を使って人混みを避け、サッと買い物を済ませて家に帰る途中で信号を待っている時、２人の女子高生の会話がふと耳に入ってきた。
「ねぇ知ってる?最近結構音楽をネットに上げてるｏｗｎってアーティスト。」
「あ、知ってる!聞いたこともあるよ。なんて言うか、心にグサッてくる曲だよね。」
「うん。歌詞もすごく重くて、歌い方もまるで叫んでいるようでね。」
何気ない彼女達の日常会話が、何故か耳から離れなかった。ｏｗｎか。帰ったら聞いてみるか。
何をどう生きたらこのような曲が生まれるのだろうか。帰宅し、自分の部屋でｏｗｎ

の音楽を聞いた俺が、まず真っ先に思い浮かんだのはそんな事だった。音楽には、どんな曲にでもある程度の感情が篭もるものだ。ＰＯＰなら明るい感じ、失恋ソングなら悲しい感じ。そんなイメージをみんな持っているだろう。

しかし、ｏｗｎの音楽は次元が違った。死にたい。消えたい。希望なんて一欠片も見えない、真っ暗で、尖っていて…、過去の俺なら共感したであろう曲だった。

セカイでの話を聞いた後ならハッキリと分かる。

これは雪…、朝比奈まふゆが手がけた音楽だ。

ニーゴで活動している時はここまで顕著な曲は無かったが、これが恐らく、彼女の本心なのだろう。

曲を聴いたあとの鳥肌が収まらないまま、昼食を作るためにキッチンへと向かった。

その日の２５時、雪はナイトコードにはいなかった。

「あれ？雪が居ないね。」

「ホントだね。昼間にはまた夜にねっていってたのになぁ。」

どうやら昼の間はいたらしい。ならば旅行などとは考えづらい。

「ａｍｉａ、雪からなんか聞いた？」

「いや特に何も。強いて言うなら、雪のお母さんが結構な毒親だなって思っただけ。」

「それ、どういうこと?」
「いや、関係ないだろうし、言うのはやめとく。」
「まぁ、雪ちゃんと学校行ってるらしいし、疲れちゃったのかもね。」
　という会話が聞こえてくるが、恐らくそうじゃない。会話の中で出た親のことや、その他のことで今日彼女に限界が来たとしたら?俺だったら静かで誰も来ない場所でずっと一人でいたいだろう。

……まさか
誰も来ない場所。静か。消えたい。
もしも、彼女がセカイの存在を知っていたとしたら?
結論を出す前に、俺は即座に「ｕｎｔｉｔｌｅｄ」を開いた。

スマホから出た光に包まれたと同時に、どこまでも真っ白で、虚無の広がるセカイに俺は一人佇んでいた。
しかし、今日のセカイの客は俺一人では無いらしい。とは言ってももう一人はこのセカイの主人なので、客という表現では俺一人なのだが。
「雪であってるか?今日、ナイトコードにこないと思ったら、こんな所にいたのかよ。」

そう声をかけると、彼女…朝比奈まふゆは静かにふりかえる。彼女の目は何も映しておらず、見ていると飲み込まれそうなぐらいの深い闇が広がっていた。
「その声は、アハトだね…。なんで、ここにいるの？」
「今日ナイトコードにログインしてなかったし、もしかしたらと思ってな。」
そう返すと、ふぅんと特にに気にもとめない様だった。
「それで？私を連れ戻しに来たの？だったら私は戻らないよ？」
どうやら相当に追い込まれているらしい。いや、追い込まれているという表現は違うな。全てがどうでも良くなったと言うべきか。
「いや、別に連れ戻そうとは思っていない。ただ雪が戻ろうと思うまで、俺がここにいるだけだ。」
雪は特に気にも止めずに好きにしたらいいよと返した。了承は得たので、俺は彼女と背中合わせになるように静かに座る。
そのまま何も話さずに、ただ時間だけが過ぎていく。十分経った？それとも一時間？はたまた一日？時間感覚は無いが、スマホを確認する気には全くなれなかった。かなり経っているはずだが、空腹にはならなかったし、喉も渇かなかった。
「なんで私のそばにいてくれるの？」
ふと、彼女はそう尋ねた。

「別に…。俺がここにいたいからってだけだ。」
「ふぅん。変なの。」
ナイトコードでのボイスチャットとは全く違う言葉遣いだ。おそらくこちらが本当の朝比奈まふゆなのだろう。
それから、またただ時間だけが過ぎていく。来た時のピリピリした空気はどこにもなかった。まるで俺たちが空気に同化したような心地がした。
「静かだね。」
もうしばらく経つと、まふゆがポツポツと話しかけてくるようになった。
「来た時に見たけど…、アハトの目はどうしてそんなに腐っているの？」
ふと、そんな質問が飛んできた。
「まぁ、向こうの腐った現実を散々見てきたからな。聞くか？俺とこの目の馴れ初め。」
背中越しにこくりとうなづいたのを感じたので話し始めた。
産まれた時はまだ目はキラキラと輝いていたこと。
妹が産まれてから親は俺に構うことが無くなったこと。
幼稚園、小学校、中学校といじめられ続けたこと。
その段階で段々と目が腐り始めたこと。
高校での出来事。

彼女は終始無表情で聞いていた。

「…辛かった?」

そう聞いてきた。普通の人なら同情する所なのだろうが、帰ってきたのはあまりに不躾な質問。このセカイの様に、きっと彼女は何一つとして感情など持ち合わせてはいないのだろう。

「楽しくなかったことは確かだな。」

と返すと、また静かに時間だけが過ぎていく。

「…私の話、聞いてくれる?」

「…話したいなら勝手に話せばいい。」

そう。と言ってポツポツと話し始める。

「もうアハトも気づいてると思うけど、私、感情が無いんだ。嬉しいと思うことも悲しいと思うこともないし、ただ、消えてしまいたいって思ってるだけ。」

俺はただ黙って彼女の話を聞く。

「親や友達が望む理想の私を演じている間に、分からなくなっちゃったんだ。やりたい事も、好きな食べ物も嫌いな食べ物も、何もかもが分からなくなっちゃった…。」

どうやら相当に重症らしい。俺は誰からも求められずにただ目だけが朽ち果てた。

しかし彼女は周りからの押しつけに応え続けるうちに心までもが朽ち果ててしまった。
「アハトは、こんな私をどう思う？」
俺は思ったままに答えた。
「別にいいんじゃねぇの？」
彼女は少し…、ほんの少し面食らったような表情を浮かべた。
「これは俺の昔の話なんだけどな？」
今日はいつもの言葉は使わない。今の目の前の少女には感情がない。友達の友達の体験談なんて、目の前の壊れた少女に届きはしないのだ。
「かつての俺は、変わることは逃げだと説いた。変わるってことは、今までの自分を否定することだ。だから俺は変わる必要なんてないって思ったんだ。」
「だけど、Kと出会って、他の数少ない恩人に出会って、知らない間に自分が変わっていることがあるって気がついた。割と最近だけどな。」
「だから…、変わろうとする必要なんてないし、意識的に変えられるならそんなものは自分じゃない。それに俺は、偽りでできた欺瞞の関係が大嫌いなんだ。だから、いつものボイスチャットの猫撫で声なんかよりも、今のお前の方が好きだぜ。」
まふゆはほんの少しだけ、淡い笑みを浮かべた。
「本当の私を見つけてくれたの、アハトが初めてだよ。だから私、もう少しだけ消えずに

いようと思う。アハトは…、アハトだけは私の本物になってくれそうだから。私は朝比奈まふゆ。アハトも本名、教えてくれる？」

彼女はそういった。そうか…。彼女もまた、本物を求めていたのか。たとえ偽ったとしても、善人の仮面をつけていても、本当の自分を見つけてくれる相手を。

「八幡だ。ま、いいんじゃやねぇの？もう少し向こうを満喫しても。だけど、一つだけ間違っていることがあるな。」

まふゆはこてんと首を傾げる。

「お前にとっての本物は、俺だけじゃない。」

その瞬間、二人だけで構成されていたセカイに、一人の従者は三人の客人を連れて舞い戻った。壊れてしまった主人を救うために。

「雪…だよね？本当に心配したんだから！」

えななんが言う。

「そうだよ！何も言わずに一週間もいなくなっちゃってさ！」

ａｍｉａも続いて言う。…ん？

「おい待て、今一週間って言ったか？」

「そうだよ…。その間、家にカップ麺がなかったから買いに行くはめになったんだけど。」

奏が恨みがましくこちらを睨んで言う。どうやら俺も一週間行方不明ということになっていたらしい。
「ま、まぁ俺のことはいいだろう。それより朝比奈。お前のために新たに三人の仲間たちが来てくれたんだ。人生案外、捨てたもんじゃないだろ?」
「…うん、そうだね。」
こうして、期待に応え続けた末に壊れてしまった少女は、一人の青年と従者によってほんの少しだけ修復され、本当の自分を見てくれる三人の友達を得た。
「八幡、ありがとう。まふゆを救ってくれて。」
従者は和気あいあいとする四人の少女達を眺めながら俺にそう言った。
「生憎だが、俺は救ってないし、まだ救われてもいない。あいつの感情はまだ戻ってないし、些細なきっかけで…、俺が聞いた限りでは少なくとも親を何とかしない限り、また消えたいと思うようになってしまうだろうな。」
しかし、そんな俺の言葉に、従者はそんなことは無いと言う。そして従者は、そっとある方向を指さした。そこには、何も無かったはずのこのセカイに、一輪だけ、白い花が凛と咲いていた。アネモネだ。色は背景と何ら変わらないが、その花は背景と同化することなく、その存在を誇示していた。
「白いアネモネ…。期待、か。」

昔、花に興味があった時に調べた花言葉がまだ頭に残っていたらしい。とは言っても、この花以外はまるで覚えていないが。

このセカイも、まふゆが感情を取り戻した時には花畑に変わるのだろうか。そんな意味の無い事を考えながら、ミクと共に四人の少女達をいつまでも眺め続けた。

閑話

平塚ｓｉｄｅ

「くそっ!こんなことは前代未聞だ!」

平塚は狭い牢の中で壁を殴りつけながら誰にともなく怒鳴りつけた。

教師は学校中に蔓延した無実の生徒の悪口を一切止めずにいじめを見過ごしていたと教育委員会に烙印を押され、そんなことは教師として、一人の人間として言語道断ということで、校長教頭含む教師は全員教員免許を剥奪されたのだ。そして総武高校も廃校となった。一部の生徒（葉山、戸塚、川崎、材木座）以外の殆どはどの高校にも受け入れられず、早くも就職先を探すことになってしまった。

教師陣も教員免許剥奪という肩書きが残り、なかなか再就職先が見つからないのが現状だ。

「それもこれも比企谷のせいなのに、どうして私ばかりにしわ寄せがくるんだ!ただ比企谷の態度が悪かったから更生させるために殴ったり部活に入れたりしただけじゃないか!」

特に平塚は、暴力など、警察沙汰の行為も行っていたため、刑務所に入れられる事になった。

損害賠償も決して安くはなく、一人の少年の人生を台無しにしたとの事で、総武全体で八幡に総額５０００万円の損害賠償となった。とは言っても、株で稼いでいた八幡に取ってはあってもなくてもあまり変わりはない額であったが。

「くそ！比企谷のやつ、この塀の外に出たら、必ず抹殺のラストブリットを食らわせてやる！」

そう意気込んだが、その後彼女の姿を塀の外で見たものは誰一人としていなかったという。

雪ノ下ｓｉｄｅ

「はぁ…、どうして比企谷君にあんなことを言ってしまったのかしら。」

田舎町の小さなアパートで独り言る。というのも、私が比企谷君に散々罵倒を浴びせた上に彼が家族と離れてしまうきっかけになったことがマスコミにバレて、父、母共に職を失い、田舎町に引っ越して、小さな工場で家族全員働いているのだ。

皮肉なことにも、彼女の世界を変えるという目標は、家族と総武校生と教師陣のセカイを限りなく悪い方向に変えるという形に終わってしまった。

姉さんは被害者の比企谷…、八幡くんから法廷にて彼女は今回の件には関係なく良好な関係を築いていると供述されたのでお咎め無しということになっている。
ちなみに葉山君のお父さんは雪ノ下家の顧問弁護士だったが、隼人のほうが比企谷君の事を全てマスコミにリークし、父は法廷で形式上は総武側に付いていたが、実際は比企谷君に付いて総武に相応の報いを受けさせたため、正当な判断のできる弁護士だと買われて、昇進したらしい。
彼の依頼解決の仕方はいつも斜め下なやり方だったけど、無意味なことは何一つとしてしていなかったことに今更ながら気づく。
しかもその上彼の妹の小町さんにもこの事を事実をねじ曲げて伝えてしまったせいで、彼は絶縁されたというのだ。本当になんということをしてしまったのだろう。だけど後悔とき既に遅し。こんな思考に意味は無いのだ。せめて一言謝りたかったが、彼が今どこにいるかは姉さんしか知らないし、教えてもくれなかった。
きっとこれから先も、このような意味の無い後悔を重ねながら小さく惨めに生きていくのだろうと思いながら、ここに来てから数え切れないぐらいについたため息の回数をまた一回増やし、眠りに着いたのだった。

由比ケ浜ｓｉｄｅ

「ヒッキーほんとに信じられないし！」
由比ヶ浜結衣は荒れていた。
曰く、海老名さんにした告白を自分にして欲しかったらしい。
曰く、総武が廃校になり、持ち前の頭と経歴ではどこにも編入できなかったときに、ヒッキーが助けてくれなかったことを怒っているらしい。
曰く、曰く、曰く…。数えればキリがない。
由比ヶ浜の父も、総武のニュースが大々的に取り上げられ、娘がその主犯だと会社に知られ、左遷されたらしい。由比ヶ浜は友達と別れたくない、などと言っていたが、はたして今の彼女に友達と呼べる存在がいるのかどうかも怪しいところだった。
由比ヶ浜の両親は、彼女にどうして道徳心が備わっていなかったのか悩み、悔やんだ。しかし、そんなことは後の祭りだった。
朝から部屋で荒れている結衣を怒鳴りつけ、父は仕事に向かう。待遇がいいとはお世辞にも言えず、由比ヶ浜家のストレスはとうに限界を超えていた。しかし、法廷で決まった比企谷君への損害賠償を払いきるまでは申し訳なくて、死んでも死にきれない。
「また大人になったら、千葉に戻ろう。そうしたら、きっとヒッキーに会えるよね。会ったら修学旅行の時みたいに告白してもらって、付き合うんだ。だから待っててね、ヒッキー…」

由比ヶ浜家はこのときを持って完全に崩壊してしまった。その数年後、由比ヶ浜は再び千葉に足を踏み入れたが、ヒッキーの影も形も見つけられなかったという。

小町ｓｉｄｅ

「ごみいちゃん、本当に信じられない！」
八幡の元妹である小町も、由比ヶ浜同様に荒れていた。近所では、人格者であった八幡を追い出したことで毎日のように悪口を言われるようになり、父と母は会社の同僚に、小町は学校の友達に罵詈雑言を浴びせられたらしい。。
父と母は会社の上司にメンタルカウンセリングを勧められ通院した所、今までの自分がおかしかったことにようやく気がついたのだ。ちなみに小町には何の効果もなかったらしい。
気づけたことはよかったが時すでに遅し。もう二度と八幡の顔を見ることも出来ないのだ。
その日からは、小町を今までのように甘やかすことはせず、厳しく育てたという。
新しい学校でも、小町は兄を反面教師にして身につけた持ち前のコミュニケーション能力を発揮し新しい友達を作り一時怒りが納まっていたが、総武での事がバレた瞬間、その新しい友達も離れていってまた荒れた。

父と母は、言い分を聞かずに追い出してしまった八幡のことを思いながら…、小町はお義姉ちゃん候補を泣かせて自分をこんな目に合わせた八幡を恨みながら虚しい毎日を過ごしたらしい。

第１１話

まふゆの一件で全員で本名を言い合ったが、ナイトコードでは今まで通りコードネームで呼び合うことになった。それと瑞希、絵名が企画した新曲完成記念のオフ会にも行った。奏は外に出たくないと言い張ったが、さすがに何日も引きこもっていると体に悪いので、いい機会だとばかりに俺が無理やり連れだした。ちなみにまふゆ、絵名、瑞希の本名呼びは強制されました。

オフ会の会場はサイゼリヤとなんとも学生らしいものだったが、会って話すのは案外悪くないものだと思った。絵名と瑞希が騒ぎすぎてまふゆに絶対零度の目線を浴びせられていたときは二人ともガタガタと、どこかの館の金髪少年のように震えていた。あの一件以来、まふゆは俺たちに対して素の言葉を使うようになった。目も俺みたいに腐っているというわけではないが、この世の深淵を覗いたような目だ。初めて会った時よりかは目に輝きが戻っていたが、まだまだ人によっては悲鳴を上げるレベルだ。店員さんが来たときは完全に取り繕っていた。

料理が届いたところで瑞希が乾杯の音頭をとる。絵名は元気に返すが、俺含む残り三人はどこか冷めていた。

「ちょっとそこのお三方〜？ 元気なさすぎじゃないの？」
「いや、ボッチにこんなさもリア充みたいなノリを求められてもな…。」
「そもそも私は外に出たくなかったし…。」
「私、こういうのわからないから。」
　と、三者三様の供述をした。俺と奏はそもそも合わせ方を知らないし、まふゆは学校の友達といるときは無理して合わせるが、このメンツならば合わせる気もないといった感じだ。本当にこのグループは全員が個性の塊だなとつくづく思う。
　オフ会開催後、奏とまふゆはまた新しく作る新曲の打ち合わせをしていて、絵名と瑞希はスイーツの話をしていた。俺はもちろん一人で黙々と食事にいそしんでいた。
「ねぇ八幡、あんたはスイーツとか好き？」
　絵名がこちらに話を振ってきた。
「まぁ、好きだな。」
「それじゃあ今度のオフ会は喫茶店にしようかな。」
　と瑞希がつぶやく。が、それはやめておいた方がいいだろう。
「やめとけ。５人で食べに行くだけならまだしも、オフ会となると騒がしくなる。話したいならファミレスの方がいいだろ。」
　というと、二人は納得したらしい。

「それもそうだね!それじゃあオフ会とか抜きにしてスイーツを食べに行こう!」
と瑞希が言うと絵名はそうだねと答える。プロのボッチになると、一人寂しく食事をしていた俺に同情して甘いものが好きかを聞いただけで、そのスイーツを食べに行く件に関しては俺を一切誘っていないことがわかr
「もちろん八幡も行くでしょ?」
…そうだった。俺はもうボッチじゃない。仲間がいる。そんな少し前に理解した事実にまた胸が温かくなる。もちろんだと返した後、奏から新曲についての話が振られる。
ニーゴの中で俺は伴奏を担当しているが、俺は一人しかいないので録音したものを奏に合成してもらっている。結成当時はそれぞれができることをするだけといった感じで、統一された目標はなかったが、あの日あのセカイで出会ったときにニーゴとして全員が共有する目標ができた。
【聞く人全員の心に残る音楽を作る】
俺と奏からすれば何をいまさらといった目標だったが、全員の意思を統一できたことは大きい。もちろんこの聞く人全員というのはニーゴのメンバーのことも含まれている。出会って実際に彼女たちを見て分かった。まふゆはもちろんだが、絵名と瑞希も何かしらの闇を抱えている。とはいっても内容は一切わからないし、本人たちも話す気は

無いみたいなので突っ込むようなことはしないようにする。まふゆの時はミクやセカイから大体の内容は分かったが今回は一切わからない。地雷もわからないからしばらくは静観することにする。とは言っても絵名の悩みはあらかた見当がついているのだが。

「それじゃぁ次の曲の相談も終わったし、お開きにしようか。私この後塾あるし。」

お開きには全員賛成したので会計は割り勘して店を出る。本来ならば男である俺が全部払うところなのだろうが、今日はオフ会なので割り勘ということになった。その代わりに今度個人的に出かけるときは全額よろしくと絵名と瑞希に釘を刺されてしまった。まぁ今では数百万の買い物でもない限りは大打撃は受けないのだが。

ファミレスから出た時、空はすでにオレンジ色に染まっていた。総武にいたときは夕日が好きだった。夕方になれば家に帰れるから。部室から解放されるから。だけど今は夕日がみえても何も思わなくなった。朝日が昇ろうが月が昇ろうが、今は俺を罵倒するやつはもう俺のセカイにはいないから。朝日が昇ろうが月が昇ろうが、目の前にはいなくても心でつながっている仲間がいるから。だから俺は今前を向いていられる。

かつての俺は、自分のことを人形…、ピノキオの生まれ変わりだと思っていた。平然と虐待を繰り返す親から作られ、奉仕部では部員の期待を裏切って、俺に関わるものすべてを不幸にする存在だと思った。そしていつか自分が不幸にした誰かにナイフで刺

され、木に吊るされ、誰にも見つけてもらえぬままひっそりと腐っていくものだと思った。

だけど、奏と出会ってから、奏の音楽を聴いてから、ニーゴのみんなと出会ってから。自分はただ誰かを不幸にする存在ではないと気づかされた。原作なんて知らない。ピノキオが歩んだ人生は俺には関係ない。俺は人を幸せにするという、自分自身の道を歩く。俺は、もう人形じゃない。

俺は守りたいものを、自分自身の在り方をしかと目に、そして心に留め少女たちの隣を歩いた。

第１２話

「アンタみたいな才能の塊に！私の何がわかるって言うのよ！」

ファミレスから帰った後、今晩もいつも通り２５時にナイトコードに集合してそれぞれ作業を始める。変わったことといえば前までよりも全員の間で会話が増えたことだろうか。普段は絵名と瑞希だけで成り立っていた雑談も、今では全員が参加している。とは言っても俺、奏、まふゆは特に話題もなくほとんど聞き手に回っているが。

歌いたくなった時や曲ができたときには、ミクに曲を聴いてもらったり一緒に歌ったりしている。セカイはカラオケと違って金もかからないし、防音どころか自分たち以外いないので何のしがらみもなく歌える。俺は楽器担当だがセカイで歌うときの伴奏はギターを使っている。弾き語りも案外悪くないものだ。ちなみにネットに投稿するときは全てミクに歌ってもらっている。一応身バレは避けたいし、特にまふゆなんかは知

り合いも多いからバレやすいだろうということでだ。
コメントでは結構高評価をいただいている。多くの人が心に響いたなどと言ってくれるのでこちらとしても嬉しい限りだ。

今日も作業を終えた後、俺はセカイに歌いに来ているが、今まで奏、まふゆ、瑞希とは一緒に歌ったことがあるが、絵名だけは一度も見かけたことがなく、誘っても作業があるからといつも断られていた。それだけなら作業熱心だなと思うだけだが、どうもそれだけじゃないのだ。なんというか、追い込まれているように感じるのだ。
スマホを見て時刻が朝の6時になったころ、満足して歌うのをやめた。今日はミクは散歩でいなくて俺一人で延々と歌っていた。そろそろ帰ろうと思ったときに、セカイに一人やってきた。絵名だった。ただ昨日の昼にあった時とは違って、どこか思いつめた表情をしていた。
「よう、絵名。奇遇だな。」
「あ、八幡。奇遇だね。何してたの?」
「歌ってたんだ。なんかたまにものすごく歌いたくなる時があるんだよ。絵名は?」
「私は…、現実逃避かな…。」
どうやらなにかあったらしい。一歩踏み込んで何かあったのかと聞いてみる。何で

もないと答えたが、そんなわけがないだろうと食い下がる。すると渋々といった感じで話し出した。

「実は、お父さんが画家なんだけど、私に絵は向いてないって言われたんだ…。私には才能がないって。だから逃げてきちゃった…。」

その話を聞いて、俺はほんの少しだけうらやましいと思った。

「そうか…。でもな、何かをするのに才能なんて関係ない。」

というと、絵名は、は？というような目でこちらを睨んだ。

「なんで？才能は大切でしょ？才能がないとやっていけないんだから！」

「そんなことはないな。才能がないからなんていうのは只の言い訳だ。」

そう言うと、絵名は激昂した。

「なによそんなの！そんなの、才能があるからそんなことが言えるんでしょ！」

「アンタみたいな才能の塊に！私の何がわかるって言うのよ！」

絵名の本心が見えた瞬間だった。どうやら絵名は才能至上主義らしい。だが、俺は何かをするのに才能が必要だとは絶対に思わない。

「俺は絵名じゃないからお前の気持ちなんて一生理解できない。でもな、これだけは言

える。お前が絵を描き続けるのに、才能は絶対にいらない。」
俺は絵名を真っ向から否定する。落ち込んでいる相手を慰める。これも相手を思いやる一つの行動だろう。しかし、そんなものは問題の先延ばしにしかならない。真っ向から自分の思いをぶつけて、絵名に前を向かせる。
「なぜだか説明してやろうか?それはな、俺が…、俺たちニーゴが、お前の絵が必要だと思っているからだ。」
絵名は茫然と俺の話を聞く。
「絵名がいなけりゃニーゴじゃねぇし、絵名の絵がなきゃニーゴとしての作品は完成しない。」
「でも!私に才能がないことには変わりないでしょ⁉ 結局は才能がないと大成しないんだから!」
絵名の心からの叫びだった。悲痛な叫びだった。自分が心からそう思っていることで、ひっくり返らない事実。だけどどこか否定してくれることを望んでいる叫びだった。
「そうかもしれないな。」
絵名は愕然とした。しかし俺はお構いなく続ける。
「アスリートだろうとアーティストだろうと、プロになって輝く人たちは才能を持った

人たちの中のほんの一握りだ。世界の第一線に凡人が入り込む余地なんてない。」
「なによ!そんなの、私っていう存在の全否定じゃない！」
絵名は叫ぶ。自分を励ましてくれるであろう相手から自分を否定されて。
「いや、全否定じゃないな。俺は世界で輝くのなら才能が必要だといったんだ。でもな、」

「ニーゴというグループで輝けるのは…、絵名以外にはいねぇんだよ。」

絵名は絶句した。今まで言われたことのないことを言われたから、理解しきれなかったのかもしれない。だから俺は何度だって想いをぶつける。
「たとえ絵のプロが来たって、たとえ世界で活躍する絵師がニーゴに入りたいと言ったって、俺たちニーゴは世界でただ一人、絵名だけを選ぶ。そこに才能なんて一切関係ない。」
絵名は目に涙を浮かべながら俺の言葉をかみしめた。彼女は今日、本当の意味で居場所を手に入れた。
「それに俺は、お前が親に恵まれたことがうらやましい。」
絵名は目に涙を浮かべたままきょとんとする。

「子への肯定が愛だとするなら、否定もまた愛だと思う。お前の親父は画家としての苦難を知っているからお前にその道を選ばせたくなかったんだろ。俺の親父は、俺には何の興味も示してはくれなかったからな…。」

言い終えるころには、絵名の目に溜まっていた涙は外へと流れだしていた。

今日この日、絵名の限りなく灰色に染まったセカイは色彩にあふれる絶景へと変貌したのだった。

第１３話

絵名が泣き止んだ後、昼から一緒に出掛けることになった。財布は株で大儲けしたのでホクホクだし、こっちに来る前は結構な頻度で誰かのショッピングに駆り出されていたので荷物持ちには自信がある。１１時に昼は食べずに集合とのことで一度解散する。

思い切り演奏して歌って汗が凄かったのでシャワーを浴びてから着替える。ぶっちゃけ一睡もしていないが一日ぐらいは平気だ。まだ奏はぐっすりと寝ているのでとりあえず自分の分のトーストだけ用意して食べる。食器は後から奏も使い、今洗うと二度手間となるので今は洗わずにシンクにおいておく。水につけた方が汚れが落ちやすいとも言うが、細菌が繁殖しやすいとも言う。どうしたらいいのだろうか…。

部屋に戻って特にすることもないのでキーボードを触る。今までは本を読むのが趣味だったが今では音楽が第一の趣味だ。楽譜は用意せずにただ思ったようにキーを弾くだけ、それがたまらなく楽しい。思ったように演奏するだけだからいい曲が引けたと思っても覚えてなくて譜面に写せないのが玉に瑕だが。

何も考えずにだらだらと演奏していると奏が起きてきたので奏の朝ご飯を準備する。

ちょっと前に聞いたが、俺が来る前までは朝昼夜と缶詰かカップラーメンだったらしく、どうしてそんな不摂生な食生活で肌が綺麗なままなのかが気になった。普通なら肌荒れを起こしていても不思議ではないのだが…。

奏が食べ終わった後は部屋で二人でセッションする。俺が伴奏で奏が歌う。誰かとうたうときの楽曲は自作の時もあればカバーの時もある。さすがに誰かとセッションするときに自分の思うがままに演奏しても併せられないからな。セカイではコンセントが無くキーボードが使えないので部屋でするときは基本キーボードを使う。グランドピアノもあるにはあるのだが、これは俺と奏では調律できないので使う日が来れば調律師に依頼する予定だ。

そうこうしている間に時間になったので支度をして奏に声をかけてから家を出る。お財布よし、服装は…、今日のショッピングで絵名に見繕ってもらうか。あいつ私服のセンス結構いいし。今日の予定を計画しつつ、急ぎ足で集合場所に向かった。

絵名ｓｉｄｅ

セカイから戻ってきてから朝ご飯を食べて部屋でイラストを描く。八幡の言葉が心に沁みわたって、今までただ認められたい一心で描いてきたものが今ではニーゴのみんなの期待に応えるためと、絵を描く理由が変わった。この変化が良い方向へと向かうの

かはまだ分からないが、今までよりも凄く気分も調子もいい。さっきも彰人に「絵名、いつにも増して機嫌がいいがなんかあったのか？」と聞かれた。自分ではそんなに表に出していないつもりだったが彰人にはまる分かりだったらしい。今日は友達とデートに行くと言ったらびっくりされた。あの絵名が⁉と驚かれてムッとしたので蹴りを入れておいた。

いつにも増して集中していたらいつの間にかちょうどいい時間だったので自分が今できる最高のおしゃれをして家を出る。彰人は前に話していた相棒くんと出かけたらしいので家にはお父さんしかいなかった。出る前に行ってきますと声をかけると、お父さんは驚いて目を真ん丸にした後でいってらっしゃいと返してくれた。どうやら八幡が言ったように本当に嫌われているわけではないらしい。そんな事実に少し嬉しくなる。

いつも出掛ける時よりも心なしか足取りが弾んでいた。

八幡ｓｉｄｅ

渋谷駅で待つこと十分、手を振ってこちらに向かってくる絵名が見えた。

「ごめんね、遅くなっちゃって！待った？」

「そんなに待ってないぞ。」

絵名は「そこは今来たところっていうでしょ」と言うが、生憎そんなリア充みたいなセリフは知らない。
そろそろ行こうかと絵名が歩き始める。今日は全部俺持ちだからか絵名の足取りが弾んでいるように見えた。そりゃそうだ、他人の金で食う飯ほどうまいものはない。つまり専業主夫は至高だということだ。
そんなバカなことを考えながら絵名についていくと、メンズの服屋についた。服を選んでほしいとはまだ頼んでいなかったがそんなに俺の服は見ていられなかったのだろうか。(グレーのパーカーにチノパン)
店の外観は凄くおしゃれで、俺にとっては場違い感が半端ない。そんなことは気にも留めず絵名は店に入って手招きしてくる。ここでうだうだしていてもしょうがないので渋々店に入る。
「全く…、なんであんなに音楽はできるのにファッションはてんでダメなのかしら…。」
まずは自分で選んでみろと言われたので自分が気に入ったものを持って行ったが全滅だった。この店にはいい服が多いがどうやら俺は合わせ方がなっていないらしい。やれやれと言った感じで絵名が俺の代わりに服を見繕ってくれる。着せ替え人形になって、ようやく絵名は満足したのか納得のいった表情をしていた。
「うん、これでいいと思う！目はあれだけど素材はいいから結構凝ったファッションが

試せるわね。」

　目があれなのはデフォルトだから仕方がない。選んでもらった服を購入して店を出る。普段の服の４倍くらいしたが、この服も結構気に入ったので特に気にはならない。

「さぁ、次はメガネ屋に行くわよ！」

「俺、目は悪くないんだけど…。」

「ファッション用の伊達メガネよ。私はあんたの目は嫌いじゃないけど服と合わせるなら少しでもましな方がいいでしょ？」

　確かに一理ある。というわけでメガネ屋にやってきて試しに着けてみたわけだが…

「えぇ⁉め、メガネひとつでこんなにも変わるんだ…。」

　絵名も店員さんも驚愕していた。そんなに変わるものなのか疑問に思って鏡を見てみると、

「…いや、誰やねん。」

　思わず関西弁で突っ込んでしまった。それぐらいまでに長年の付き合いだった目の腐りが無くなっていたのだ。案外メガネを外しても治っているんじゃないかと思ったが、外した途端にいつもの自分に早変わりだった。

　　　メガネを買うのは絶対だと言われたので購入する。さっき鏡を見た時に思ったが案外悪くないので着けたまま絵名のショッピングに付き合うことにする。

メガネ効果なのかさっきよりも多くの視線に刺されるが気にしたら負けだと絵名の隣を歩く。俺持ちだからとどっさり服やアクセを買うのかと思ったがそんなことはなく、本当に欲しいものだけをちまちま購入していた。

少し歩くと、モール内に今までは見たことのなかった楽器店があった。

「あれ?ここに楽器屋さんなんてあったかな?新しく出来たのかも!八幡、寄ってこ?」

特に断る理由もなかったし、普段使っているもの以外の楽器も見てみたかったので入店する。中にはバンドに使う基本的な楽器やグランドピアノが置いてあった。

「ねぇ八幡、ピアノ弾けるでしょ?ちょっと弾いてみてよ。」

グランドピアノには俺も触れてみたかったので、店員さんに許可をとって椅子に座る。キーボードを弾く時は立ってするので少し新鮮な感じだ。しかし弾けないということは無い。

深呼吸をして落ち着いてから、そっと鍵盤に触れる。曲は、

ベートーヴェン　ピアノソナタ　１４番　月光

俺が学生時代に最もよく聴いた曲の一つだ。この曲を聞いていた約十六分の間は何もかもを忘れられて、ただ自分の世界に入れていたのでよく聞いていた。月光だけではなく、ピアノソナタは全て弾きたかったがあいにく時間が無いので月光だけにする。

　第一楽章は抑えられない悲しみを込めて演奏する。文化祭で周りから罵詈雑言を浴びせられた時、殴られた時、修学旅行で信じていた二人から拒絶された時。その時のことを思い出して鍵盤を流れるように押す。
　第二楽章は空元気。奏と出会った当初の俺だ。悲しみを、怒りを、全ての感情を押さえ込んで何も無いように振る舞う様に鍵盤に触れる。
　第三楽章は溢れる感情。信じられる仲間を得られた喜び。本物が目の前にあるという歓喜。そして…、元総武生への怒り。なぜ、俺は罵られた？なぜ、俺は殴られなければならなかった？なぜ…、俺は何もしていないやつに拒絶されなければならなかった！溢れ出る感情を全て込めて鍵盤を叩く。
　周りも見ず、ただ鍵盤を押した、触れた、叩いた。自分だけのセカイに入った。
　演奏が終わった頃、周りは無音だった。周りを見渡すと、大勢の観客が、ただこちらを見つめていた。不思議に思いながら席を立つと、周りは我に返ったのか溢れんばかりの拍手を俺に送った。俺の演奏が褒められただけなのに、何故か自分のことまで褒められた気がして…、自分の人生を肯定してくれた気がして、悪い気はしなかった。
絵名に終わったぞと声をかける前に詰め寄られた。
「凄いね八幡！なんか、上手くは言えないけど八幡の今の全てが詰まったような曲だっ

た！」

絵名からも高評価を頂いた。その事実に自然と頬が緩む。だから俺は、感情に従ってみることにした。

法廷で総武に通っていた葉山、戸塚、川崎、材木座以外のすべての人間を…法のもとに叩き潰して二度と社会に出れないようにしてやる。今度は、俺の番だ。

第１４話

　絵名と遊び終わったあと、俺は直ぐに雪ノ下さんに電話をかけた。今は忙しくなかったのかほんの数コールで出てくれた。
「もしもし八幡君?·どうしたの?·」
「実は総武高校と法廷で勝負しようと思いまして。」
　というと雪ノ下さんは驚いた。
「まさか八幡君がそこまでするとは思わなかったよ。」
　自分自身でも少し驚いている。前までの俺ならもう終わったことだからと誰がどこでどうしていようと気にも止めなかっただろう。
　しかし、月光を弾いて、今の自分の気持ちがよく分かった。俺はアイツらを心の底から嫌悪し、俺と同じような目に合わせてやりたいと思った。だがしかし暴力に走るのは下策中の下策。もちろん訴えられるからでは無い。そんな一時の苦痛よりも永遠に続く苦痛を見せてやりたいと思ったのだ。
「自分に素直になったね。ま、こんなこともあろうかと、証拠は全て押さえてあるよ。」

　その後直ぐに携帯に写真と動画が届いた。そこには俺が先生や生徒に殴られている写真、教室や部室、至る所での俺に対する誹謗中傷の声を残した音声。そんな物が沢山あった。

「戸塚くんや材木座君、川崎さんと隼人が色々集めてくれてたんだよ。流石にこの量には驚いたけど…。」

　アイツらにはお世話になりっぱなしだな…。裁判が終わったら飯にでも誘おうか。

「告訴するのは知ってると思うけど本人が行かないといけないからね。一応私もついて行ってあげるから。」

「ありがとうございます。明日告訴して、その後の日程はお伝えします。」

　というと了解と返事が聞こえたので電話を切った。

　家に帰ると望月さんが来ていた。

「あ、八幡さん、おかえりなさい。アップルパイ食べますか?」

　頂くと返事をして手を洗ってから席に着く。奏は既に食べ始めていた。

「八幡さん、この前はありがとうございました。おかげでみんなと蟠りなく遊んだり出来てます。」

「気にすんな。俺がいなくたって、いつかはそうなってただろうよ。」
　口ではそう語るが、本心は打ち震えていた。本当に俺でも人が救えたのだと。たった一言、ありがとうだけでここまで心が踊ったことは無かった。そもそも言われたことがなかった。
「そうかもしれませんけど、こんなにも早くみんなと分かり合えたのは八幡さんのおかげですから。」
　その後は三人で他愛もない話をした。その中で、望月さん達がバンドを始めたことを聞いた。
「へぇ、バンドか。望月さんはどの楽器なんだ?」
「私はドラムをやってます。イメージと違いましたか?」
　と聞かれたので、そんなことはないと返す。
　時間になったので望月さんは帰る準備を始める。すると何かを思い出したのかカバンの中をゴソゴソと漁って、一本の缶を取り出す。それは見慣れた黄色と黒で彩られた、甘い甘いコーヒーだった。
「これ、美味しかったので、私も最近よく飲むんです!この前八幡さんがくれたから、八幡さんも気に入ってるんじゃないかと思ったので、お裾分けとお礼です。」
　と言ってＭＡＸコーヒーを二本くれた。近くではあのスタジオにしか売っ

ていないのですごく嬉しかった。このコーヒーは裁判の前に一本、終わったあとにもう一本飲もうと決めて冷蔵庫に入れる。出来るならば、終わった後に飲むコーヒーがいつもよりも甘くなっていることを願うばかりだ。

告訴状は無事に受理され、裁判はとうとう明日に迫っていた。裁判は学校全体でのことであまりにも人が多いので、俺を罵ったり殴ったりした主犯格、雪ノ下、由比ヶ浜、校長、教頭、平塚のメンバーが被告人代表という形で裁判することになった。

俺が原告ということで俺の方には検察が付くが、総武側の弁護士には葉山の父さんが付くことになった。が、電話で聞いたところ総武の味方をする気は一切無いらしい。弁護士としてどうなのか甚だ疑問に思ったが、葉山さん曰く、弁護士とは正しい人を救う、また、反省している人間の罪を少しでも軽くするための存在だということで、今回は俺に付いてくれることになった。

裁判を前日に控えた今日、俺は葉山、戸塚、川崎、材木座、そして雪ノ下さんと会うことになっていた。

渋谷駅で待っていると、

「はちまーーん!!」

と俺を呼ぶ天使の声が聞こえた。

「とっかぁ!!」
　俺は返事をして、飛びついてくる戸塚を抱きとめた。
「久しぶりだね、八幡!」
　おう、と返事をすると、後からバテた様子で残りの四人が走ってくる。
「と、戸塚…、早過ぎないかい?」
　あの葉山もバテていた。戸塚、そんなに俺と会いたがってくれていたのか、と思うと、柄にもなく頬が緩む。
　挨拶を済ませて検察の方と合流し、近くのスタジオで明日の打ち合わせをする。本来ならもう少しきちんとした場所で打ち合わせをするのだろうが、俺の意向に合わせてここにしてくれた。
　１時間ほど裁判の流れや証拠写真の確認をしてから検察の方は先にスタジオを出る。
「ハポン!ところで八幡よ、何故会議場所をスタジオに選んだのだ?」
　決まってんだろと返してギターを手に取る。
「ギターを引くためだ。お前らに、今の俺を…、今までとは違う俺を音で感じて欲しいと思ったからだ。」
　全員驚いた顔をしていたが収まったところで深呼吸をして弦に触れる。冬

で悴んでいるはずの手が、弦に触れた瞬間春の光に溶かされるように手が、指が動くようになる。

その後は思い切りギターをかき鳴らした。今の俺の全てを込めて。

演奏を終えた頃には、全員が目に涙を浮かべていた。

「うん、今までのあんたとは別人なんじゃないかってくらい…、情熱に溢れた音だったよ。」

「八幡、すごく…、すごく良かったよ!」

「うむ!八幡の魂の叫び、しかと我の心に響いたぞ!」

「これは、もう免許皆伝かなぁ…。あっという間に私よりも上達しちゃって…。」

「ああ…、本当にその通りだよ。僕のせいで君は居場所をなくしたんじゃないかって、すごく悔やんでいたんだけど…、こんなにも心に響いて…、何だかまた比企谷に救われたような気分だよ。」

みんなが俺のために涙を流してくれていた。

戸塚のことは会った時から天使だと思っていたが、心のどこかで少し頼りないやつだと思っていた。

だがこうして今俺が相手に牙を向けた時、隣に立っていてくれる。ここまで

頼りになるやつだと俺は知らなかった。

　川崎のやつはあった時は冷たい奴だと思った。誰にもたよらず、自分一人で何とかしようとする。同族嫌悪だろうか。

　それが今はどうだ。目の前の仲間たちと協力して、俺を助けようとしてくれた。本当は俺とは違って、人を思いやる心のある出来た人間だった。

　材木座は会ってからずっと面倒くさいやつだと思っていた。事ある毎に俺にしがみつく情けないやつだと思っていた。

　しかし、そんな考えは即座に吹っ飛んだ。面倒くさい事には変わりないが、俺のために証拠を集め、大一番で逃げ出すことなく、誰かに助けを求めることなく俺を助けようとしてくれた。

　雪ノ下さんのことは、今まで面倒くさい人だと思っていた。どこかで会う度に俺に絡んできて、何かと俺の心を抉るような発言ばかりしてきた。

　だが今はどうだ？一言一言が俺の心を癒し、そして今、俺の力となってくれている。

葉山のことは、はっきり言って嫌いだった。欺瞞に満ちた関係を良しとして、自分さえも偽って過ごしていた葉山が気に食わなかった。

だが今は、少なくとも嫌いにはなれなかった。俺一人のために今までの関係を全て粉微塵にし、今までの友を全員敵に回し、俺を救おうとしてくれた。

今まで本当にダメだったのは、俺なのかもしれない。

本物を求めたくせに、自分は誰も受け入れようとしない。

寄り添ってくれる奴がいたのに、そいつらを遠ざけようとした。俺に近づいたらそいつらまで虐められてしまうからという免罪符を盾に、誰とも関わりを持とうとしなかった。

家を出たあの日、俺は納得していたのだ。諦めていたのだ。今までの自分の考えが、矛盾を抱えた行動が、つなぎ止めていたものを全て壊してしまったのだと勝手に考えた。

しかしどうだ。今、俺の前には五人の友達がいる。俺の行動を救いに思い、そして今度はそれを返そうとしてくれる仲間がいた。

俺は…、今までの俺は、何一つとして間違ってなんか居ない！明日の裁判で

勝って、それを証明してやる！

　この日、人を救い続けた1人の青年が、大きな決意を胸に抱いた。時間は正午。雲ひとつ無い空から照りつける太陽は、冬空の下の凍てついた台地を溶かしていった。

第15話

「私は…、弁護士葉山直次は、今回の裁判において被告人を弁護するという責務を放棄させていただきます。」

「被告人代表1名は前に出てください。」

　そう言われて雪ノ下が前に出る。大人が代表でも良かったと思うのだが、中心人物は雪ノ下、由比ケ浜、平塚先生辺りなので妥当であろう。平塚先生は余計なことを言いかねないので雪ノ下が前に出たのだろう。予想通りだ。

「名前はなんと言いますか?」

「雪ノ下雪乃です。」

「住所はどこですか?」

「千葉県○○市××××です。」

「それではこれから千葉市立総武高校でのいじめに関しての裁判を行います。検察官は訴状を読み上げてください。」
「それでは、訴状を読み上げます。」
　いよいよ裁判が始まる。検察の方が訴状を読み上げてくれている間、いくつもの嫌な目線を感じる。総武の連中がこちらを睨んでいるのが伺える。こんな事態になってなお反省すらしていないとはなかなか強かであると思う。いや、頑固なだけか。傍聴席にも勢揃いしていて鬱陶しいことこの上ない。ただ、その場にいる三浦だけは全く別種の視線だった。少し気になるが、今は裁判に集中することにする。
「以上について、審理をお願いします。」
　検察の方が訴状を言い終えた。さて、アイツらがどう出るのかが楽しみだ。
　裁判長は自身の発言がいい意味でも悪い意味でも証拠になりうることを注意した上で訴状の通りかを質問した。
「はい、概ね事実です。しかし、それら全ては原告、比企谷八幡が全ての原因であると断言致します。」
　この発言で辺りがザワついた。いじめに関してを訴状でこと細かく説明したが、その原因が全て原告にあると聞けば、そうなるのも必然と言えるだろう。あと、俺はもう比企谷じゃねぇ。しかし、流石に公衆の面前では弁えているのか、クズ谷やゴミ

谷など、侮辱するような発言はしなかった。
「静粛に。それでは雪ノ下さん、訴状の内容を認めていますが、八幡さんが原因であると言いましたね？根拠を教えて貰えますか？」
「はい、彼が学校中から暴言を受けるのには理由がありました。それが、文化祭での出来事です。」
　雪ノ下が文化祭での出来事をこと細かく説明していく。虚言は吐かないと言っていたのは事実のようで、その発言の中に嘘は一切見られない。
「という訳です。よって彼は暴言を吐かれても当然であると主張します。」
　しかし、嘘偽りが全くないというのは今回は下策だ。なぜならその供述の中には文化祭実行委員が揃わなくなったことも、委員長がエンディングセレモニーに来なかったことも含まれていたのだから。
「それでは、検察官は質問をどうぞ。」
　検察の方は立ち上がって質問を始める。
「まず最初にですが、訴状を確認した時に総武高校のほとんどの生徒が八幡さんに暴言を吐いていたとありますが、その中に来なくなった実行委員の方々も含まれていたのですか？」
　その質問にはいと答えたことにより、辺りはまたザワつく。雪ノ下が供述し

た時に俺は実行委員をサボっていなかったこともしっかりと明言していたので、この時点で俺が原因でないことは証明された。
「ありがとうございます。しかし、その答えが本当だったとすると…、その時点で八幡さんが暴言を吐かれるのはお門違いだと思いませんか？」
　彼女の嘘をつけない性格が仇となった。雪ノ下は何も答えられずにいる。
しかし質問はまだ続く。
「…答えられないようですので次の質問に行きますね。実行委員長がエンディングセレモニーに来なかったので八幡さん一人に探しに行かせた、との事ですが、どうして八幡さん一人に行かせたのですか？大人数で探した方が効率的だったのでは無いですか？」
「それは、委員長を探す為の時間を稼ぐ必要があったからです。エンディングセレモニーが近づいていて、そうしないと到底間に合わないと思って私たちで時間を稼いでいたので比企谷君一人に行って貰いました。」
「ふむ、そうですか。…しかし、他にもやりようはあったのでは無いですか？今の答え方からすると、時間を少しでも稼げば八幡さん一人で広い校舎の中から一人を見つけ出してくれると言う事だと取れますが？例えば、ほかの実行委員の人に協力してもらうとか。」
　そう言われると、雪ノ下はまた黙り込む。

「最後です。八幡さんが委員長に屋上で暴言を吐いたと言いましたが、あなた達も同じことをしていますよね？」

雪ノ下の顔が真っ青になった。

「ちょっと！ゆきのんに酷いこというなし！」

由比ヶ浜が茶々を入れる。しかしこのタイミングは逆効果だ。

「雪ノ下さんに聞くなとの事なので、代わりに由比ヶ浜さんに聞きますね。どうして八幡さんが屋上で委員長に暴言を吐いたことは悪とみなされ、自分たちが八幡さんに暴言を吐くことは当然だと言えるんですか？」

ここでは黙り込む、という選択が最善だろう。しかし、由比ヶ浜はそんなことは考えられなかった。

「はぁ？そんなの当たり前じゃん！ヒッキーは悪口言われて当然でしょ？修学旅行でも姫菜に嘘告白してたし！」

由比ヶ浜ここで考えられる限りの最悪手を打った。黙っていればただ言い返せないだけであった。しかしここで原告を馬鹿にする発言は被告人として反省をしていないと発言しているも同義だった。

しかもここで、俺が訴状には一切書かなかった修学旅行での事を暴露した。この話題は奉仕部メンバーとも密接に絡んでいて、尚且つ俺が家族に絶縁されたことに

も絡んでくる、被告人としては絶対に触れさせたくない話題に自ら踏み込んで言ってしまった。これをアホの子と言わずしてなんと言えるだろう。校長先生や教頭先生は何も知らされていないのか首を傾げている。その一方で雪ノ下と平塚は顔を真っ青どころか真っ白にしていた。

そしてこの話題に検察官の人が食いつかない訳が無い。

「修学旅行のこと?なんです、それは?聞かせて貰えますか?」

雪ノ下と平塚先生は目線で止めようとするが、それに気がつく由比ヶ浜ではなく、自信満々に話し始めた。それはもう、余すことなく全て。自分から受けようと言って奉仕部メンバー全員に無理やり告白を失敗させせないという依頼を受けたことから俺が絶縁されたことまで全て。

被告人サイドは既に放心状態だった。

「弁護士の方は、何かありますか?」

裁判長は被告人の放心状態を悟ったのか弁護士に話を振った。

「…今回の件について、何か証拠となるものはありますか?」

証拠を求められたので数ある証拠の中の数個を検察官が選んで提示する。

そして葉山弁護士は口を開いた。

「私は…、弁護士葉山直次は、今回の裁判において被告人を弁護するという責務を放棄さ

せていただきます。」
　辺りは更にザワついた。弁護士が職務を放棄するようなものだ。そうなっても当然だろう。
「静粛に！葉山弁護士、理由をお聞かせ願えますか？」
　葉山さんは堂々と発言する。
「私は、弁護士の責務について、無実の罪を着せられた被告人や、事を起こしてしまったが己の行いを悔いて反省している被告人に救いの手を差し伸べることだと考えております。」
「しかし、今回の件はどうでしょう。裁判が始まる前の打ち合わせでは無実だと平塚さんから聞き、それを信頼した上でこの場に弁護士として立ちました。しかし法廷で話を聞くと、全く違うではありませんか。弁護士として信用するべき被告人からは虚言を吐かれ、法廷の場においてそれが発覚してなお反省の意を見せない被告人がいる。このことから、私は今回の裁判において弁護を放棄させていただきます。」
　この後はサクサクと話が進み、証人を呼ぶ必要もなく判決を言い渡される段階まで来た。
「判決を言い渡す。雪ノ下雪乃は名誉毀損罪にあたる発言を何度も行った、また、原告と家族の関係を断ち切った張本人として罰金５０万円を言い渡す。」

雪ノ下は先程からずっと真っ白な顔で放心状態のため特に反応しない。

「由比ヶ浜結衣は雪ノ下と同様の罪、また、反省の色がないと見なし罰金６０万円とする。」

由比ヶ浜はギャーギャー喚くが裁判長の修羅のごとき静粛にを受け押し黙る。

「平塚静は自身の生徒への暴行罪、傷害罪及び恐喝罪。弁護士への虚偽報告罪、また、軽犯罪法違反として、これは極めて悪質であると判断し、執行猶予無しの無期限の懲役とする。」

平塚は聞いた途端にこちらを思い切り睨みつけるが、今更痛くも痒くもない。

「それ以外の学校関係者は、悪質な生徒の噂を流した、またそれを止めなかった為軽犯罪法違反として、総額五千万円の罰金を命ずる。これにて閉廷！」

上手くいったな。由比ヶ浜が修学旅行の話を持ち出してくれるとは思わなかったがラッキーだった。

「検察の方、葉山さんも、ありがとうございました！」

そう言って頭を下げる。この二人には本当にお世話になった。

「気にしないでくれ。検察として、当然のことをしたまでだ。しかし、まさか君があそこまで重い過去を持っていたとは思わなかったよ…。」

検察の方はそう言って苦笑する。俺は検察の方が見てきた中でも類を見ないほどの不幸っぷりらしい。しかし、今思えばそんなことは無い。

「今となっては、そこまで不幸では無いですよ。失ってしまった縁もあったけど、得た縁もあることが事実です。しかも前よりも大切にしたいと思えるほどの。だから俺は多分幸運なんだと思いますよ。」

と言うと検察の方はまた苦笑して強さだねと返した。

「まぁ、縁とは不思議なものだからな。俺も雪ノ下家の顧問弁護士として雇われて縁を得たけど、結局今回その縁を切った。でも、俺が弁護士になったのは法廷でも言ったが裁判官の様に自分の良心に従って正しい人や己の行いを悔いている人を救いたいからだ。だから、俺がしたいことをしたんだ。君が礼を言う必要は無いよ。」

本当によく出来た人だと思う。まさに弁護士になるべくして生まれた人だと本気で思ってしまう。

「ところで八幡君、君が親から絶縁されたと聞いたけど、もし良かったら、君を引き取ろうと思うんだけど、どうだい？」

これはありがたい申し出だ。しかし、俺には帰る家がある。だから、受けら

れない。
「すみませんが、帰る家があるんです。居候ですけど。だから、受ける訳には行きません。」
「そうか。でも、親権を引き継ぐだけだから、居候先に居ても構わないよ。苗字はあった方が便利だし、それに何より、これは俺からのお願いで隼人と一緒に編入先の学校に行って欲しいんだ。」
　葉山さんはずるい。俺はさっき葉山さんにありがとうございましたと頭を下げた。この時点で俺は少なからず葉山さんに恩を感じているという表明になったわけだ。つまりお願いと言われてしまえば、俺としては応えなくては気が済まない。
「…葉山さん、ずるいですね。」
「法廷で戦ってきたからね。」
　サラリと返されてしまった。
「お願いとあらば、仕方がありませんね。受けます。」
　と言うと、葉山さんは嬉しそうにうなづいてくれた。
「うん。それじゃあ今日から葉山八幡だね。僕のことは父さんと呼んでくれたまえ。あと、敬語も禁止だよ。」
　少し気恥しい気もするが、父を苗字呼びするのもおかしな話だから仕方がな

い。

「わ、わかった、父さん…。と、ところで、編入先の学校ってどこなんだ？」

　父さんは声高らかに告げる。

「宮益坂女子学院だ！」

「……は？」

第１６話

「宮益坂女子学院ですか？名前にもあるように、女子校ですよね？」
　父さんはうなづく。真面目な雰囲気なのでどうやら冗談ではないらしい。
「ああ、女子校なんだがな…、宮女の理事長が知り合いで耳にしたんだが、近々共学化する計画が立っているからそのテスト生を募ろうと考えているらしい。だけど一般に募ったら邪な連中が入ってこないとも限らないだろう？そこで俺の方に話が回ってきたってわけだ。ちょうど総武も廃校になったしな。」
「なんで何十年と女子校だったのに急に共学化しようってことになったんです？」
「宮益坂って学力的には全国レベルだろう？だけど男子がそこに入れないということで学力の高い息子を持つ親御さん方がかなりボヤいた結果らしい。」
　なるほど、そういう理由ならまぁ納得がいく。親も自分の子が勉強できるならいい学校に入れさせてやりたいもんだろうからな。
「ところで、俺と隼人で宮女に行くんですよね。戸塚たちはどこに行くんですか？」
「ああ、戸塚くんたちなら近くの神山高校に編入するらしいよ。あと、三浦さんも一緒だ

と言っていたね。」
三浦か。彼女も今回の件は被害者だと言えるだろう。グループ崩壊の危機にあったのに彼女だけが何も知らされていなかったのだから。
彼女が法廷で由比ヶ浜の口から修学旅行の全てを聞いた時、自分のグループに対して、総武に対して、そして自分に対して失望したかのような顔をしていた。
助けてもらっておいて平然とその立役者の悪口を広めていた戸部と海老名に。
何も知らずに、何も見ずに、何も考えずに二人に同調し平然と立役者を馬鹿にしていた総武の生徒たちに。
人を正しい道へと導く義務のある教師が、生徒の根も歯もない悪口を聞いても注意することなく、それが当たり前であるかのように平然としていたこと。
由比ヶ浜に押されて流されるままにクラスも違うくせに依頼を受け、比企谷と由比ヶ浜に任せきりにしたくせに最後には文句をつけた雪ノ下に。
海老名が誰とも付き合う気がないことを忘れ、誰の気持ちも考えず平然とその依頼を受けて、失敗したら人の気持ちを考えろと言って退けた由比ヶ浜に。
そして、いざと言うときには何も聞かせてもらえない薄っぺらいグループのリーダーである、哀れで滑稽な自分に。
彼女は中学の時、総武に受かるほどの学力はなかった。しかし、並々ならぬ努力をし

てようやく名門の狭き門をくぐり抜けた。
しかし、どうだ? 彼女のくぐり抜けた門の中には、生徒の半数どころか九割強が、考えることを放棄し、ただ噂になっている人間の悪口を言うだけの無能の集団だった。
幸いなことに、検察と弁護士、そして証人グループのお陰で、彼女はお咎めなしということになった。しかし、彼女の心の傷は相当な大きさであった。
「そうですか。戸塚たちと離れ離れになるのは少し残念ですね。」
彼女には裁判が終わった後に謝罪を受けた。他の生徒みたいに彼女から何かされた覚えもなかったので困惑したのだが、それで少し気が楽になるのならと受け取った。
「まぁ、隼人と仲良くやってくれ。明日土曜日に理事長に挨拶に行って、月曜日から登校だよ。」
わかりましたと返して帰路につく。先ほど話したように住む場所は今まで同様奏の家でいいらしい。ニーゴのメンバーにも学校の件も報告しないとな。
時刻は午後八時。ニーゴとしての集合完了時刻は二十五時だが、今日は金曜日ということもあってすでに全員ナイトコードにログインしていた。
「というわけで、明日から宮女に通うことになった。」
というと絵名と瑞希はいい反応をしてくれた。

「え!?あんた男でしょ?なんで女子校に入んのよ!」
ことの経緯を説明すると納得してくれたらしい。
「はぁ、八幡が宮女に行くんだったらそっちにしとけばよかったかなぁ…。夜間定時制だから普段遊ぶ友達もいないし…。」
とボヤいていた。
その後もみんなと雑談しながら作業をしていたが、いつもよりも口数の少ない瑞希のことが気になった。
ナイトコードのメール機能を使って個人チャットでセカイに呼び出す。ニーゴの方にはコンビニに行くと適当に誤魔化して俺はセカイに入った。

セカイに入ってから数分とたたずに瑞希がやってきた。ミクはその場にはおらず、どうやら散歩に出かけているようだ。
「どうしたの?急にセカイに呼び出して。」
瑞希はいつもの調子で話しかけてくるが、その声はどこかぎこちない。
「それはこっちのセリフだ。今日、かなり口数少なかっただろ。いつもは喧しいくらいなのに、何かあったのか?」
聞くと、瑞希は驚いたような顔をしてから俺に質問を投げかける。

「…八幡はさ、可愛いものが好きな男子ってどう思う?」
…なるほど、そういうことか。女子校の話をしてからこうなったことで違和感を覚えたが、今の質問で理解した。つまるところ、瑞希は恐らく女子校に通いたかったのであろう。しかし、それは叶わなかったという事だ。
「可愛い物好きの男子?そんなの普通のことだろ。」
そこで瑞希はまた驚いた。なんでこんな事で驚くのか?そんなの考えればすぐにわかる。恐らく瑞希は、今までの自分が誰からも受け入れられなかったのであろう。
男子はかっこいいものが好きである。黒や青が似合う。短髪で長髪だとしてもポニーテールなどにはしない。
そんなくだらない他人の価値観や常識に押しつぶされてきたのであろう。
「極論を言ってしまえば、男子が可愛いものが好きなのはおかしいというのなら男子は猫を好きになってはいけない、と言ってるようなものだからな。」
というと瑞希は少しだけ吹き出す。
「フフッ、そんなの屁理屈じゃん。」
「屁理屈も理屈のうちなんだよ。とにかく、男子が可愛いものを好きになってはいけない理由なんてどこにもない。関心のないものを好きになるよりも好きなものをもっと好きになる方がいいだろ。楽だし。」

好きこそ物の上手なれ、という諺がある。好きでやっていることは自然と上達するものだ、という意味だ。可愛いに上達するという概念はないと思うが、好きなものを追いかけ続けてもっと好きになれたら、それはより楽しいだろう。

「好きなものを追いかけ続けるのって楽しいだろ？ 俺の場合は音楽だな。聴くだけでも好きだった音楽が演奏できるようになってより好きになった。瑞希の場合は可愛いものが好きなんだろ？ いいじゃないか、追いかけたら。瑞希の人生は瑞希だけのものだ。誰にも口を挟む権利はない。」

言いたいことを言い切った後、瑞希は吹っ切れたような顔をしていた。

「そっか、そうだよね！ ボクが可愛いものを集めて誰かに何か言われても何も関係ないもんね！ こんな事でクヨクヨするなんて、らしくないなぁ。」

「まぁ、誰だってそんな時はある。なんなら俺はどんなことでもとことんまで悩むめんどくさい性格をしてるまである。」

ここでようやく、彼女の本物の笑顔を見ることができた。

「それと最後に。月曜日、瑞希が素っ頓狂な声をあげるような転校生が来るから楽しみにしとけ。」

月曜日に転校生の戸塚を見て、八幡の予想通り瑞希が素っ頓狂な声を上げたのは別のお話である。

第１７話

月曜日。今日から待ちに待っていたわけでもない学校生活が幕を開ける。２年の１２月に転校なんて普通なら変な話だが、総武が潰れたのは大々的にメディアに取り上げられたので今回は異常が普通である。
「新しい学校生活、楽しみだね。」
「バッカお前、まず教室に入って俺の目を見ての悲鳴、自己紹介で噛んで嘲笑、侮蔑の眼差しを向けられるに決まってんのに楽しみなわけねぇだろうが。」
「決まってるのか…、なんというか、八幡らしいね。」
　隼人とくだらないやりとりをしながら宮益坂女子学院に向かう。共学校でも初っ端から変な目で見られたのに女子校となると目があったら通報されるまである。いや、通報されちゃうのかよ…。
　馬鹿なことを考えながら歩いていると、ようやく見えてきた。理事長に挨拶したりしないといけないという理由で他の生徒よりも早めにきているので、辺りに生徒はいない。下駄箱に着いたが置く場所がわからないため念のために持ってきていたビニール袋に靴を入れ、スリッパを履いて理事長室に向かう。近くに校内の地図があったのは有

り難かった。
　部屋の前に着いたのでノックを４回して返事を待つ。入室の許可が出たので隼人と共に入室する。
「よく来てくれたね、八幡くん、隼人くん。私が宮益坂の理事長だ。」
　予定の時間よりも早めに着いたのが運の尽きか、説明の後、理事長から延々と愚痴を聞かされた。これには俺も隼人もぐったりである。
「あの、理事長、そろそろ始業時間ですので…。」
　隼人が止めにかかった。時計を見るとかなりギリギリだ。
「あ、すまないね。それじゃあ最後に。この学校は総武とは違っていじめの類は一切ない。だから、後一年と少ししかないけど、いい学生生活を送ってくれたまえ。」
　退室して走って職員室に向かう。始業ギリギリなので生徒は全員教室に入っているらしく、生徒と出くわすことはなかった。
　スリッパで走りにくかったこともあって、職員室にたどり着く頃には息も絶え絶えだった。なんだよ、この間取り。普通理事長室って職員室の隣にあるもんじゃないの？しかし息を整える時間もないためすぐにノックして職員室に入る。
「失礼します。今日から編入になった葉山隼人と葉山八幡です。」
　中に声をかけると教師たちに一瞬だけ怪訝な表情をされたがその後すぐに納得した

表情で業務に戻っていった。おそらく俺たちが来る日だと分かっていても慣れないから顔に出たのだろう。

「あぁ、二人とも！こっちこっち！」

女性教師がこちらを手招きしていたのでそちらに向かった。

「おはよう！二人とも結構ギリギリだったね？」

理事長に延々と愚痴を聞かされたことを説明すると同情の眼差しを向けられた。

「理事長、暇さえあれば誰かに愚痴るからねぇ…。朝から災難だったね。それじゃあクラスに案内するけど、二人は別々のクラスだからね。」

「なにそれ初耳なんですけど…。」

「まぁ、テスト生だし同じクラスに入れたら男子だけで話しちゃうかもしれないでしょ？それを避けるためにも我慢してね！」

まぁ、それなりに筋は通っている。仕方がない。上手くやっていけるかはわからないというか十中八九出だしから滑るだろうが…、俺だし。ぼっちでいることぐらい造作はない。

先生に連れられて教室に向かう。自分の足で向かっているのにドナドナと頭の中に流れているのは俺の心の持ち方ゆえだろうか。

正直言って怖い。またあんな視線を向けられるかもしれないと思うと怖くて仕方が

ない。だが俺にはニーゴの仲間がいる。総武の数少ない仲間がいる。それに理事長はここにいじめはないと言った。人を救おうとするものが人を端から疑ってかかってどうする。裏切られるまでは信じると決めた。だから俺はこの不安をまやかしであると思い込む。
「隼人くんはB組だからここね担任は私。八幡くんはD組だからこっちの諸星先生に着いていってね。」
「じゃあね八幡、また後で。」
「おう。」
隼人にしばしの別れを告げ、一つ教室を超えてD組に着いた。
先生が中に入って行って転入生がいると伝える。それだけでも騒つくのにテスト生の男子だと分かるとさらにどよめく。このどよめき様からして、理事長たち生徒にテスト生のこと伝えてなかったのかよ…。
「それじゃあ入ってきて!」
呼ばれてしまったので教室に入る。
（わ、目が腐ってる…。）
（え?でも結構イケメンじゃない?）
（私結構タイプかも。）

入った途端にヒソヒソ声が聞こえた。悪口を言われていないか不安になる。
「それじゃあ、自己紹介よろしく！」
「あっ、はい。葉山はちみゃ…、ウッウン、葉山八幡です。」
嚙んだ。それはもう盛大に、誤魔化しが効かないぐらいに。こういうところは成長していないなとつくづく思う。
(嚙んだ！ちょっと可愛くない？)
(うん、人前に慣れてないのかな？というか…、)
((((それだけ⁉？))))
「は、八幡くん…もうちょっとなんかない？」
自己紹介とは文字通り己を紹介することだ。名前さえ言えればいいんじゃないのかと思う。しかし俺は目立ちたくないので好きなものでも紹介することにする。
「あっ、ええと…、好きな飲み物はＭＡＸコーヒーです。」
俺が見つけ出した法則。ボッチは大体しゃべる前にあっという。
「え、ええと…、それじゃあ拍手！」
先生の苦し紛れの機転のお陰でクラス全員が拍手してくれた。よし、なんとか自己紹介は乗り切った。あとは寝たふりで時間を稼ぐだけだ。
「それじゃあ八幡くんはあそこの日野森さんの横にすわってね。」

そう言って指を刺された方向に空席があったのでそこに座る。

さて、あとは寝たふりをして時間を稼ぐだけだ、と意気込んだが、そう上手くはいかなかった。ホームルームを終えた瞬間に周りの生徒がガタッと立ち上がり、ちょっと尻込みをした瞬間に周りの生徒はこちらに突撃。机に突っ伏す暇もなく囲まれてしまった。その後に待ち構えているのは地獄の質問タイム。はぁ、憂鬱だ…。

ただ、隣に座っている日野森さんと、女子の隙間から見えた少し離れた席のピンクの髪の女子のどこか上の空な様子が気がかりだった。

第１８話

あれこれ質問攻めにあっている間に休み時間が終わった。そのうち飽きるだろうから今だけ我慢だ。

質問攻めにあった後は、体育館での集会で共学テスト生ということで紹介された。葉山が隣に立っていたせいか、俺の目が腐っていたせいか、生徒たちはかなり騒ついた。

「それでは二人とも、自己紹介をお願いします。」

先ほどとは違って丁寧な言葉遣いの理事長に隼人がマイクを渡された。

「はじめまして！二年Ｂ組にテスト生ということできました、葉山隼人です。この校舎の構造とかは詳しくないので声をかけた時は答えて欲しいし、逆に俺には質問とかあっても無くても気軽に話しかけてください。よろしくお願いします！」

言い終わると拍手の嵐だった。なに、ミュージカルなの？と思わなくもなかったが女子校にイケメンが来たのだ。無理もないのだろう。

隼人が俺にマイクを渡してくる。挨拶は一人でいいじゃないかと思ったが、ここで話さないのも悪目立ちするかもしれないと思ったので大人しく話す。

「葉山八幡です。二年Ｄ組でお世話になります。まぁ、俺はテスト生の間平和に暮らせたらいいと思ってます。よろしくお願いします。」

クラスの時とは違って今回は噛まずに話せた。隼人の時より若干拍手が小さい気がするが、それでもここまで拍手をもらえたのは初めてだった。少し気恥ずかしいが悪くないとも思う。

俺たちの話も終わって壇上から降りたあと、理事長の長い話を聞き、ようやく寒い体育館から解放された。夏は暑くて冬は寒い。最悪の場所だな。日本国内はどこでもそうだが、体育館は特に顕著な気がする。

集会が終わったあとは教室でロングホームルームだったのだが、特にすることがないので全員で自己紹介をすることになった。俺は最初にしたので免除だ。

隣の席の女子は日野森雫、桃髪女子は桃井愛莉というらしい。どこかで見た顔だと思ったが、小町がよく見ていた番組にレギュラーで出ていたアイドルだったらしい。ちらっと見た程度だったのであまりよくは覚えていないが。

ホームルーム終了後、下校のために全員が新しいクラスメイトと会話しながら教室を出ていく。

日野森と桃井も例外ではなく一緒に帰るのかと思ったが、教室を出て向かう方向は全

員とは逆。朝に校内見取り図を見た時のうろ覚えだがあっちは屋上に繋がる階段があったはずだ。
あのアイドルとは思えないような重苦しい空気と関係があるのだろうか。今までの俺なら気にも止めずに帰宅するところだが、どうしても気になったので後をつけてみることにした。

桃井とすれ違ったのは、俺がちょうど屋上のドアを開けようとした時だった。いきなりドアが開いたので横に避けたが、桃井はこちらを認識もしていない様子で校舎を駆けていった。
勢いよく開かれ開きっぱなしになったドアを潜ると、そこには日野森が俯いて立ち尽くしていた。
「えっと…、日野森だっけ？なんかあったのか？」
声をかけるとビクッとしてからゆっくりこちらに顔を向けた。日野森もまた俺に気付いていなかったらしい。
「あら、葉山くん、何か用かしら？」
アイドルらしい完璧な…、完璧すぎる笑顔でこちらに応対する。アイドル業で身につけた営業スマイルだろうか。

「さっき、桃井が飛び出していったが、なんかあったのか？」

雑談から少しずつ悩みを聞く、と言うのが本来のセオリーなのだろうが、これっぽっちも関係のない赤の他人がそんなことをしても無駄なので単刀直入に聞く。

「…いえ、なんでもないわ。」

「そりゃ嘘だな。桃井は必死な顔で走っていった。何もないなら普通に別れるか一緒に帰るかだろ。」

「…それなら、貴方には関係ないって言ったら帰ってくれるかしら？」

俯いて言う。声音から怒りは一切感じない。ただ、全てを諦めたような感じがあるだけだ。

「関係なくはないな。事件は発見しただけで当事者になるんだぜ？」

「何を言っても帰ってくれそうにないわねぇ…。話せば楽になることもあると言うし、聞いてもらおうかしら…。」

聞いた話によると、日野森は最近になってアイドルを辞めたとの事だ。同じ事務所のアイドルに、顔がいいだけで仕事が入ってくる、努力なんてしていない、などとボロボロに言われたらしい。

「そんじゃあ、桃井は日野森の事務所まで行ったのか…。追いかけなくていいのか？」

「…追いかけたって、仕方がないもの。」

諦観したように言う。それでも俺は…、日野森が羨ましい。
「日野森、率直に言うと、俺はお前が羨ましいよ。」
「え？」
俺の急な発言に日野森は意味がわからないと言った顔をする。
「桃井は、日野森が困って諦めてしまったことを怒って、日野森を守るために後先考えずに走っていったんだ。日野森の努力を無駄にしないために、そして、ステージで輝く日野森をもう一度見るためにな。」
「どうして…、見ず知らずの貴方に私の努力がわかるの？」
「一人の人間を情動で動かせる奴が、何もせずにただ他人をこき下ろすような人間な訳ねぇだろ。」
「努力ってのは必ず報われるわけじゃねぇ。才能ある人間がなんの努力もせずに上に上がっていくこともザラにある。けどな…、」
「人の心を動かせるやつが常に楽して、なんも努力してねぇ訳がねぇんだよ。」
「たまたまテレビを見てた時、日野森のデビュー番組がやってた。そのあとテレビで桃井を見かけたのは1、2年後だ。日野森の話を聞いて真っ先に飛び出していったってことは、きっとお前のことを目標にしてたんだと思うぞ。」
日野森はハッとする。自分もそうだったからだ。

最初はただスカウトを受けて流されるままに言われたメニューをこなしていただけだった。けど、愛莉ちゃんがアイドルとして上がってきてから、それは変わった。愛莉ちゃんのような、人を笑顔にできるアイドルになろうと必死で努力した。愛莉ちゃんに憧れた。それだけは絶対に変わらない私だ。

「わたし、行ってくるわ。愛莉ちゃんにどうしても伝えたいことがあるの。」

「おう、行ってこい。…自分を信じてくれる人は、大切にな。」

日野森は先程の桃井と変わりない様相で走っていき、あっという間に見えなくなった。

俺にも、困ったときに、挫けそうになったときに、すぐに必死になって動いてくれる友人がいたらよかったのになぁ。

今でこそ俺のために動いてくれた隼人、戸塚、川崎、材木座。ニーゴの仲間がいるが、総武にいた頃はただただ一人でいじめに耐えていた。

そんなイフストーリーを追い払って、一人帰路についた。

第１９話

日野森を見送ってから屋上を後にする。大体の学校の屋上は立ち入り禁止で人が来ないだろうからマイベストプレイス候補の一つだったが、どうやら普通に出入りできるらしいので除外だな。まぁ、総武は緩かったが宮益坂は罰則とかきつそうなのでよかったと言えばよかったかもしれない。

校門まで行くと、まふゆが一人で立っていた。こちらに気が付くと手を振って駆け寄ってくる。まだ周りに人の目があるから「明るく元気な優等生」を演じなければならないのだろう。

「どうした、誰か待ってたのか？」

「八幡を待ってただけだよ。一緒に帰ろ？」

これまでの学生生活の中で一度も言われたことのない言葉だった。一緒に帰ろう、ほとんどの学生が言ったことも言われたこともあるであろう言葉を生まれて初めて聞いた。

「別に、俺と帰ってもいいことないぞ。」

まふゆは別に構わないと言ったので二人で帰路につく。まふゆの優等生の仮面を見ながら歩いていたが、宮益坂の生徒が見えなくなったころ、ようやくいつもの調子に戻った。

「ねぇ、学校での私を見て、どう思った？」

「…それは客観的に見てか？それとも俺個人の主観でか？」

「どっちも。」

「客観的に見てならかなりの好印象じゃねぇの。たいていの奴なら感情豊かな優等生って映ると思う。俺の主観からすればうすら寒いものを感じるけどな。はっきり言って今の嘘偽りないまふゆの方が好きだぜ。ちなみにだけど、隼人の奴もまふゆの仮面にもう気づいてると思うぞ。」

「うん、知ってる。話しかけたときに「それ、疲れないか？」って聞かれた。」

予想通りとっくに気づいていたらしい。隼人も近くに雪ノ下さんがいたから雰囲気ですぐにわかったのだろう。

「まぁ、うすら寒いと言っても俺個人の主観であって、生きる上では大正解だけどな。」

この社会は変わっている奴ほど生きづらいようにできている。身近なもので例えれば多数決。もっとグローバルに言えば移民排斥思想など、大多数は少数をないがしろにする傾向がある。俺の時だってそうだ。周りが俺のことを悪く言うから周りもつられ

る。大多数に流されなければ今度は自分が少数派として排斥される。本当にクソみたいな社会だ。
「そう…、学校ではあんな感じで、今もこんな感じだけど、私と一緒にいて楽しい？」
少しだけ不安そうな顔で言った。感情どころか何の欲求もなかったまふゆに、自己承認欲求が出てきたのかもしれない。少しずつだが彼女も変化しているのだろうか。
「楽しくなかったら今頃ダッシュで帰って音楽の虫になってると思うぞ。」
ストレートに言葉にするのは恥ずかしいので遠回しに言う。昔からの癖だ。
「そう…。私も多分だけど、八幡と一緒にいると…、楽しいんだと思う。」
初めていわれた。一緒にいて楽しいと。
今日だけで…、宮益坂に一日通学しただけで初めてのことがたくさんあった。俺のことを邪険に扱わない教師に出会った。クラスのみんなや学校中のみんなから大きな拍手をもらえた。日野森と桃井の本物の関係というものを見た。友人であるまふゆと一緒に下校した。一緒にいて楽しいと言われた。
今日というこの日ほど、生きていてよかったと思うことはなかった。しかし、この先はもっと明るい未来が待っているのか、今日の幸せを上回ることはあるのだろうかと未来に期待してしまう。
「…今からどっか寄り道していくか？」

「…うん。」

こうして俺たちは家に向かっていた進路を変えてショッピングモールに向かった。

今日、私が私でなくなってから初めて少しだけ楽しいと思えた。私に変化が訪れたのはニーゴのみんなと出会ってからだ。奏の音楽、絵名のイラスト、瑞希の動画、八幡の楽器。そしてあの日みんなから受け取った温かい言葉たち。

不思議なものでみんなと話したり出かけたりするうちにだんだんと、うまくは言えないけど、自分は自分のままでいいと思えるようになった気がする。八幡は優等生であろうとする偽りの私をうすら寒いと言い、普段の私の方が好きだとまで言ってくれた。

だから、今までの目標だった自分探しはもうやめることにする。過去の私は過去の私で、今の私は今の私、そして、未来の私は未来の私だから。これからの私が何を感じてどう変化していくのか、どうなりたいのかとかはまだ分からない。だけど今私が考えていることは他人の考えじゃないから、少しだけ私に、そしてみんなに期待することにしよう。

そう結論付けて、私は家のドアを開いた。

「ただいま!」

「あらまふゆ、今日は始業式なのに遅かったじゃない。」

「ごめんね、友達とショッピングに行ってたの。」
「あら、そうなの？楽しかった？」
「うん！とっても！」
いつもの優等生の仮面をかぶって母と会話する。考え方が変わったと言っても、その相手は今のところニーゴのメンバーだけ。親と話していても特に思うところはない。
「それはよかったわね！でもね？友達と遊ぶなとは言わないけれど、遅くまで遊ぶような子はまふゆには合わないんじゃない？」
「お母さん、まふゆのためにならないとおもうわ。」
お母さんの口癖だ。まふゆのためにならないと思う。私のことを何もわかってないくせに、私のためにならないと決めつける。内心イラっとしながらもそうだねと母に返す。
…イラっと？
そっか…、私は
両親が嫌いだったんだ。
今まで私は親の言いなりになってきた。その結果、私は私を失った。勉強面に関しては惜しみなくお金をかけてくれる。テストでいい点を取ったら褒めてくれる。ご飯は何を食べたいか、など気を使ってくれてる。

だけど、友達のことだけは一度も肯定されたことがなかった。まふゆのためにならないと思う。まふゆのためにならないと思う。まふゆのためにならないと思う。親に友達のことを話すとこれ以外の言葉が帰ってきたためしがない。うざい、イラつく、腸が煮えくり返る。私は今まで、こんな親を相手に無感情でいられたの?これなら。こんな苦しい感情を持って毎日暮らすぐらいなら…

私は、心なんていらない。

この日、求めてやまないものを手に入れた少女は、その日のうちに自らの手で捨て去ってしまった。

第２０話

部屋に引きこもっている奏にただいまと声をかけて自分の部屋に入る。今日はいつになく良い気分だ。新しく編入した学校は、どうやら殆どの生徒が物好きなお人好しらしい。俺に声をかけてくるし、目だけで偏見を持つわけでもないし。いつになく心が躍った日だった。だけど、それはこの気分の理由の半分にも満たない。今日、初めてまふゆの感情が聞けたのだ。嬉しいと思う、楽しいと思う。今までこそ分からないの一点張りだったが、俺と…、俺たちニーゴと関わって良い方向に変化してきたのではないかと思う。この調子で変化していって、いつかはみんなでくだらない事で屈託なく笑い合える日が来て欲しいものだ。

晩飯を用意して、部屋でひたすらにキーボードの鍵盤を叩く。生憎セカイにはコンセントがないのでキーボードは部屋で弾くしかない。それに、なぜか今日はセカイに行く気になれなかった。今までこんなことはなかったのだが…。この時にセカイに行っていれば、まふゆの異変にいち早く気づけたのかもしれないのに…。

そんなことはつゆ知らず、俺はショッピングモールに買い物に向かった。

青柳side

少し前にショッピングモールで、ピアノで演奏するクラシックを聴いた。

俺はクラシックが嫌いだった。親父の事をを嫌でも思い出してしまうから。小さい頃からクラシックばかり聞かされ演奏させられた俺は、いつのまにかクラシックが、音楽が嫌いになった。

彰人のお陰で音楽自体は好きになれたが、クラシックだけは避けてきた。はっきり言って、月光が聞こえてきた時はふざけるなと思った。こんな事を思ってもしょうがないのだが、それでもそう思ってしまった。

だけど、気づけば足を止めて彼の演奏に聞き入ってしまった。彼のクラシックには感情があった。悲しみ、喜び、憂い、怒り。親父の演奏を聞いていたときには感じなかった何かが、そこにあった。

きっと、あれこそが本当のクラシック…、いや、本当の音楽というものなのだろう。音と奏者の共存。音と感情の共存。彰人とも感じることのできなかったセカイがそこにあった。

ふと彰人の方を見ると、彰人もまた彼の演奏に心を奪われたらしい。

演奏が終わっても、しばらくは動けなかった。

「あ、あの…」

奏者が立ち上がっておどおどしていた。ハッと我に帰った俺たちは惜しみない拍手を送った。

「…彰人、俺はあんなクラシックを…音楽を初めて聞いた。」

「…俺もだ。悔しいが、ジャンルは違うが音楽への努力と想いは現状ではあいつの方が遥かに上だ。」

彰人は下唇を噛んで悔しそうにしている。だが、それと同時にＲＡＤ　ＷＥＥＫＥＮＤに並ぶ目標を見つけた瞬間でもあった。ＲＡＤ　ＷＥＥＫＥＮＤがもう生では見ることのできない伝説だとするのならば、彼は俺たちにとっての生ける宿敵にまでなったのだ。

「…ああ。だが、今はまだ無理でも必ず超えてやろう。もっと練習して。」

「当然だ。俺たちは誰にも負けねぇ。あいつも、ＲＡＤ　ＷＥＥＫＥＮＤも超えて、音楽の頂点に俺たちは立つぞ。」

「ああ。」

少しだけ奏者に話を聞こうと思ったが、彰人と話している間に帰ってしまったらしい。また会ったら話を聞こう。きっと有意義な時間になる。そう思ってその日は彰人

とひたすら練習をした。目標を超えるために。

八幡side

買い物を済ませる前に、ふと気になったのでこの前絵名と出かけたときにピアノを弾かせてもらった楽器店に立ち寄った。しかし、前に店頭に並んでいた楽器、主にピアノやキーボードはほとんど並んでいなかった。
「あ、君はこの前の!」
ピアノの演奏の許可をとった店員さんが話しかけてきた。
「どうかしたんですか?」
「実は、君がこの前ピアノを演奏してくれてからピアノやキーボードがバカ売れしてねぇ。即決で買って行ってくれる人もいれば数日後に買いに来てくれた人もいて本当にありがたいって感じ。」
なるほど、だからこんなに楽器がガラッと変わっていたのか。俺の演奏がみんなの心を動かせたと考えるととても嬉しくなってくる。
「だからさ!もしよければ今日もピアノ弾いて行ってくれないかな?」
俺も演奏するのは好きだし、みんなが喜んでくれるのならなおさら断る理由はない。だけど、今はピアノの気分じゃない。

「すいませんが、ピアノは今の気分じゃないので別の楽器でもいいですか？」
そう告げると、店員さんはきょとんとする。
「えっ？ 君、ピアノ以外も弾けるの？」
「まぁ、民族楽器でもない限りは。」
そのあたりもいつかは極めて見たいものだが、生憎宵崎家にはないので今は弾きたくても弾けない。
「え、えっと…じゃあギターをお願いしてもいい？」
かまわないと了承し、最初に目に入ったギターを手に取って店頭に立つ。本当ならニーゴの曲を演奏したいところだが身バレは避けたいのでそれ以外にする。今回はエレキギターではなくアコースティックギターなので激しすぎる曲はできない。だから今日は俺が本物を求めたいと思う気持ちにトリガーをかけた曲を弾き語りしたいと思う。
君じゃなきゃダメみたい　オーイシマサヨシ
この曲はまだ自分が欲しいもの、求めているものがわからず、生きる意味も感じていなかったときに出会った曲だ。ただ一人に会いたいというストレートな歌詞と一途な思いが俺の欲しいものを指し示してくれた、言わば俺の原点となる曲だ。
幼少期から耳に穴が開くぐらいに聞きふけった曲だ。今の俺の技術があれば耳コピ

でも簡単に演奏できる。
　今はまだ本物を完璧に見つけたわけではないが、いつか胸を張ってこれが俺の本物だと答えられるようになった時にもう一度、今よりももっと素晴らしい音で届けたいと思う。
　前回のピアノの時とは違い、今日は最初から最後まで晴れやかな気分で演奏することができた。しばらく演奏の余韻に浸っていたが、前回と似たり寄ったりの拍手の量に我に返ってペコペコと頭を下げて店内に戻る。
「ありがとね！まさかピアノだけじゃなくてギターと歌までできるとは思ってなかったよ！」
　そう言ってもらえたものの、あの曲は借り物とはいえ未完成だ。キーとなる俺にとっての本物を見つけていないのだから。さっきの話を聞いた時にはキーボードを即決で買って行った人がいたらしいが、俺の演奏がまだまだだったのか、単純にギターは高すぎるのかは分からないが、ギターのコーナーを見ている人は多いが現段階でレジに並んでいる人はいなかった。
　是非また来てねと店員さんに見送られて店を出たところで、見知らぬ青年二人組に声をかけられた。

第２１話

　高校生二人組に声をかけられる。髪の色が特徴的だったから覚えているが、さっきの演奏の客の一人だ。
「さっきの演奏、聞かせてもらった。素晴らしい演奏だった。」
　青髪の方が感想を伝えてくれる。今までは褒められても何か裏があるんじゃないかと疑ってかかったが、音楽を始めてからその癖は無くなった。
「ありがとう。そう言われると演奏した甲斐がある。」
　伝えたいことはそれだけ妥当と思って踵を返しスーパーに向かおうとしたがまた止められる。まだ言いたいことを言いきっていなかったらしい。
「あんた、いつから音楽を始めたんだ?」
　今度は茶髪の方が聞いてくる。手を見たところ特にタコも肉刺もできていないので楽器はしていないのだろうが、純粋な興味本位だろうか。
「…まぁ、三年ってとこだな。」
　平然と嘘をつく。本当は一週間前からなのだがさすがにそれを口にすると反感を買

うだろうと思ったからだ。

「三年?　三年でギターもピアノも覚えたってのか?」

しくじった。まさかこいつらがこの前のピアノも見ていたとは…。前は今日とは違って思い切り演奏していたのでギャラリーまでは覚えていなかった。

「ああ、まぁ…、講師が素晴らしい人でな…。」

これは嘘ではない。師匠は完璧で自分に足りないものを何から何まで教えてくれた。いつか師匠にあいさつに行かないとな。

さすがにだましきれないかと思ったのだが相手は納得したらしい。

「俺は、貴方のクラシックに救われた。父さんの影響もあってクラシックがどうしても好きになれなかったが、貴方の感性あふれる月光を聴いて、クラシックの素晴らしさを知ることができた。本当にありがとう。」

何気なく絵名に言われて演奏したピアノで誰かを救うことができるとは思ってもいなかった。意図していなかったことだとしてもありがとうや救われたと言ってもらえればこみ上げてくるものがある。

「そしてその上で、俺たちはあなたの音楽を超えて見せます。」

「…それは技術で俺を超えたいってことか?」

「は?」

俺の疑問に今度は茶髪の方が返した。

俺の音楽を超える…。そもそも俺は技術に優劣は会っても音楽に優劣があるなんて思っていない。

カラオケの採点などは技術を数値で競うものだから優劣はあって当然だと思う。

しかし音楽は違う。感じ方や解釈の仕方は人それぞれで、どんな曲が人の心に残って、どんな曲が人を救えるかは数値化できないし、個人によって全然違う。

ランキングなどは一応あるが、一位だから全員を救える曲だとは到底思えない。逆にマイナーな曲が人の心を救うこともあるだろう。

俺にとっての音楽の基準は人を救えるかどうかだ。だから俺は音楽には卓越した技術なんて必要ないと思っている。

「あたりまえだろ。どんだけうまく歌ってどんだけ会場を沸かせられるか。これが俺たちにとっての音楽だ。」

「…あんたとは全然考え方が合いそうにないな。俺にとっての音楽の基準は人の心を動かせるかどうか、人を救えるかどうかだ。例えるなら子供が親に向けて歌うバースデーソング。子供の歌うつたない歌は、関係のない人からしたらそれだけだが、歌われた親はそれだけで心が温かくなる。俺にとってはこれだけでも立派な音楽だ。」

「はっ、そんなのはただの詭弁だ。ステージに立って完璧に歌って会場を熱くする。そ

れが俺にとっての音楽だ。」
音楽への考え方の違い。ミュージシャンは数多くいるが、音楽の考え方が一致しているものと出会うのは至難の業だと俺は思う。その点でいえば俺はラッキーだったのだろう。人を救うための音楽を作るメンバーたちに出会えたのだから。
そして、目の前の青年二人もそうなのだろう。音楽への考え方が一致したからコンビを組んでいるのだろう。だが俺は疑問に思う。
「ならお前らは、うまいだけの歌にあこがれて音楽を始めたのか?」
俺の問いかけに二人は少し訝しんだ後、ハッと何かに気づいたような顔をした。
「…ちげぇ。ただ完璧に歌ってるだけの音楽にあこがれたんじゃやねぇ。あの夜のRADWEEKENDの音楽はそんなちゃちなもんじゃなかった。心に響く何かがあった。それを追い求めて、そしてその上であの夜を超えたいと思ったから俺は音楽を始めたんだ。」
「…俺も気づいていたはずだった。俺はあの夜を超えるために、そしてあの時に感じたものが何かを突き止めるために彰人と組んだんだ。あの夜には父さんの技術だけの音楽にはなかった、心に響く何かがあった。だから俺は音楽をもう一度始めたんだ。」
音楽への考え方の違い。それは音楽を続ける途中でほとんどの人がぶれてしまうものだ。だがしかし、ミュージシャンを目指すもののスタートは全員同じだ。

心に響く何かがあった。

ミュージシャンだけじゃない。ゲームクリエイターを目指す者も、ユーチューバーを目指す者も。それ以外でも人の夢には必ずスタートがあるのだ。それだけは途中で忘れることはあっても絶対に変わることのないものだ。

「俺だって音楽を始めた理由はそれだ。心に響く何かがあった。俺の中で音楽への考え方が変わってもこれだけは絶対に変わることはない。」

二人は妙にすがすがしい顔だった。

「ありがとよ。あんたのおかげで、俺の中での目標を見失わずに済んだ。」

「俺からもありがとう。このままだったら俺もあこがれたものから遠ざかるだけだった。」

「俺としては音楽で伝えたいところだったけどな。」

俺の返しに二人は違いないと笑う。そして茶髪の方が俺に一枚のチケットを差し出す。

「これ、俺と冬弥と後二人で組んでるグループのライブのチケットだ。ぜひ来てくれよ。俺たちの今できる最高を見せてやる。俺は神山高校の一年、東雲彰人だ。」

「同じく神山高校の一年、青柳冬弥です。俺の原点を思い出したうえでもう一度言います。俺たちは、貴方の音楽を超える。あなたよりのたくさんの人の心を動かして見せま

す。」

「宮益坂女子学院テスト生2年の葉山八幡だ。まぁ、ライブ楽しみにしてる。」

そう返すと二人はふっと笑った後去っていった。

この日の天気は午後からは下り坂の予定だったが、雲一つない快晴で冬にもかかわらず太陽はギラギラと頂点に君臨し大地をギラギラと焦がしていた。

第２２話

　買い物を済ませた後、最近見つけた喫茶店に足を運ぶ。ここは東京では珍しいＭＡＸコーヒーを取り扱っているため、買い物の度に立ち寄っている。チェーン店ではなく個人営業の小さな店だったが、奥の席の窓からさす木漏れ日が心地よい。
　最近は楽器だけでなく作詞や作曲にも手を出しているため、ここでの作業が休日の生活のルーティーンの一部になりそうだ。それに、どうやらここの店主の謙さんは店を始める前に音楽をやっていたらしく、俺が手掛けたものを見てよく感想を伝えてくれる。とは言ってもダメ出しは全くと言っていいほどなかったが。
　それと、謙さんの娘さんである俺の一つ下の神校の一年生、白石杏にせがまれて、よく店に来る宮女の一年生、小豆沢こはねと一緒に勉強を教えたりもしている。文系科目の国語、英語、社会は俺が二人に教えて、数学、理科は俺が作詞作曲をしている間に小豆沢が白石に教えている。音楽を学んでから、国語、特に現代文が得意になって、念のためということで受けた宮女の編入試験では国語は満点だったらしい。音楽から感情を学んだおかげだろう。理系科目も音楽理論を学ぶうちに人並み以上にはなった。隼

人には負けるが。
　白石ははじめこそ勉強に対する意欲はまるでなかったが、英語を勉強したら洋楽もうまく歌えるようになるし歌詞の意味も理解できるようになると言ったら集中するようになった。他の科目も同様だ。数学、理科は音楽理論に、国語は歌詞に、社会は時代の音楽の流行に、と言った感じだ。少し無茶が過ぎるかもしれないが。父親に似てなのか音楽は好きらしい。物覚えは悪くないのでこの調子でいけば普通に学年上位に食い込めるようになるだろう。
「だぁー!!もうだめだぁ！」
　白石の活動限界が来たらしく、断末魔を上げる。勉強終了の合図はいつも白石の断末魔で、今日は店内に他の客がいなかったからよかったものの、普段いるときは目立つことこの上ない。
「八幡先輩、今日もありがとうございました！」
　小豆沢は成績はかなり良くて、はっきり言って文系科目でも現代文以外は俺が教えられることはほとんどないぐらいだが、白石と一緒に俺の授業を受けて必ず礼を言ってくれる、几帳面な奴だ。しかも近くにいるだけでマイナスイオンを感じるような癒しキャラでもある。小豆沢が俺の妹だったらなぁと常々思う。
「いや、気にしなくていい。俺が好きでやってることだからな。」

「ハチ先輩！今日も勉強頑張ったんで何か演奏してください！」
二人に勉強を教えた後、ここのピアノで店内の雰囲気に合った曲を演奏するのが恒例となっている。というのも、ショッピングモールの楽器店での一回目の演奏を白石と小豆沢も聴いていたらしく、白石が謙さんに打診して俺の店内での演奏が許可された。
軽く２、３曲演奏して店を出る。時間帯の都合もあってか客が少なかったので少々寂しい演奏会になってしまったが自分的には満足のいく音が出せたので特に悲しいといったことはない。
家に帰るために渋谷のスクランブル通りを歩いていると、２人の高校生がゲリラパフォーマンスをやっているのが目に入った。ショーなのだろうか。一人は何かを演じているように見えて、もう一人は演出係なのか、持ってきたのであろう機械のボタンをポチポチと押している。それに連動して、役者を引き立てるような演出が織りなされている。はたから見ていてなかなかに愉快なもので、立ち止まって見ている人も多くいた。途中で役者のアドリブが入ったのか演出家が少しだけ慌てるもののほとんど予想していたかのように軌道修正に入った。
そしてショーの締めくくりに役者がポーズをとった。次の瞬間、役者の真後ろが爆発した。打ち合わせをしていなかったのかは知らないが、役者は驚いた拍子に足をもつれさせて派手に転んでしまった。なかなかに派手な爆発音だったが、警官が普通に見物し

ているのを見るに、事前に許可はもらっていたのであろう。

「おい、類!こんなの打ち合わせにはなかったぞ!」

なんとも締まらない形ではあったが、ゲリラパフォーマンスは幕を閉じた。人が散っていく中、俺は役者の方に近づいた。

「これ、使うか?」

今日たまたま紙で手を深く切ってしまったために購入していた絆創膏を差し出す。

「おお!ありがとう…、って、のわぁぁぁぁ!!ゾンビだぁ!!」

誰がゾンビだよ。初対面でとんでもないことを叫びだすやつだな。スクランブル通りだから目立ってしょうがない。

「司君、こっちは片づけ終わったよ。おや?君、変わった目をしているね。」

先ほどの演出家である類とやらはこちらに向かってきた後、俺の目をオブラートに包んで触れてきた。司君とは大違いだ。

「まぁ、目のことはいいだろう。デフォだからどうにもならんし。それより、今日のショー、面白かった。」

そう言うと二人は目を輝かせてお互いを見合ってハイタッチ。羨ましい関係だ。さっきのアドリブともいえる爆発があったにも関わらず怒ることなく、関係も一切こじれる事無く二人で喜びあってハイタッチ。

これが、俺の求めていた、ずっと手に入れたかった本物の関係というものなのだろうか。お互いのことを理解しあって、お互いの自己満足を押し付けあって、それでも一切揺らぐことのない友情。演出家はアドリブをとった役者を平然と輝かせて見せた。役者はアドリブで自分の真後ろを爆破されたにも関わらず、演出家は謝ってもいないのに、平然と…、まるでそれが日常であるかのように接していた。

本当に、心底羨ましい。俺がどれだけ求めて体を張っても手に入れられなかったものが、今目の前にある。しかし、そんな表情はおくびにも出さない。

今の俺には、本物になり得る関係があるのだから。

第２３話

天馬と神代から一方的に連絡先を交換された後、家で作業するためにさっさと家に帰る。一人でも多くの人を救うために。

明日も謙さんの喫茶店で作業しようかとも考えたが、明日は特に家から出なければならない用事もないので一日中引きこもることにしようと思ったところで着信音が鳴り響く。ナイトコードのグループ通話かと思ったがどうやら違い、今日連絡先を交換した天馬からだった。

「もしもし八幡か？実は明日、フェニックスワンダーランドでショーをやるんだが八幡も見に来ないか？」

ショーか…。今日のゲリラパフォーマンスを見ていなかったら即答でいかないと答えていたが、見た後ならば話は違う。あの二人のショーには、一回では見極められなかったが人を救えるであろう要素があった。それを突き止めに行きたい。

「わかった、行かせてもらうわ。」

「そうか！来てくれるのか！フェニックスワンダーランドの関係者じゃないから当然入園料は払ってもらうが、今はキャンペーンをやっていてな。４人以上なら全員半額で入

園できるのだ！」
それはいいことを聞いた。ニーゴのみんなを誘ってみるか。まふゆは部活で来れるか分からないが、絵名、瑞希は多分来れるだろう。奏は意地でも外に引っ張り出そう。食生活は俺が何とかしているが、やはり引きこもり気味では不健康だろう。
「それはいいことを聞いた。ありがとな。」
そう言って通話を終える。
奏はともかく他の三人にさっさと伝えたいところだが、残念ながらまだ全員ナイトコードにログインしていないので後回しだ。

話は変わってつい最近の話なのだが、戸塚、川崎、材木座、ルミルミの４人で音楽ユニット「Ｃｈａｃｅ　ｂａｃｋ」を結成した。なんでもあと一人のメンバーで悩んでいたところに、偶々ルミルミを見つけて面識のある戸塚が声をかけた結果らしい。ルミルミは確か千葉に住んでいたはずだが、おそらく転校したのだろう。戸塚、川崎、材木座がこの前俺と会った時の演奏が耳から離れなくて、いつかあんな音楽を奏でたいということらしい。全員初心者らしいが、結成してからは毎日きちんと練習しているらしい。救ったというわけではないが、自分の音楽で進む道を決めてくれたというのは嬉しいものだ。

そして、それに触発されたのか隼人と陽乃さんも「Feast of Free People」というユニット名で音楽を始めている。俺もお誘いを受けたが、既にニーゴで活動しているので、グループ名は出さずに既にユニットで活動していると言って断った。代わりに、偶然にも俺へのいじめには一切加担していなかった三浦も宮女に転校していたらしく隼人が声をかけて加入。あと一人といったところで、同じく総武からの転校してきた1年の一色が飛び込んできたらしい。総武でも隼人を追いかけてサッカー部のマネージャーをしていたらしく、隼人を偶然見かけて声を掛け、ユニットの話を出されたらすぐに参加を決意したという。

現在は2グループでの合同練習をしていて、陽乃さんが残りのメンバー全員に音楽を教えているらしい。音楽は自分たちの音が大切だが、それも基礎の上に成り立つものなのでそれが正解だろう。

いつかグループ合同で演奏会をしてみたいと言われたが、生憎ニーゴはバンドではない。全員で歌うことはできるがそれは演奏会ではないだろう。それにニーゴは音楽の魅力だけでなく、謎が多いということも世間から目を引く理由の一つとなっているし、自分たちの

スタンスもあるから、ニーゴとして人前に出ることは避けたいので、考えておくとだけ伝えておいた。

夕食時になったのでキッチンで夕食の準備をする。ここに来る前に奏が買い込んだのであろう缶詰が大量にあるので、それがある程度の量になるまではそれを使ってアレンジ料理を試みている。缶詰は災害時には非常に役立つ食料品だが、消費しないとさすがにこの量は持ち出せない。ちなみにカップ麺は最近になってようやく消費しきった。最初に缶詰とカップ麺の量を見たときは頭を抱えたが、少し工夫すれば案外どうにかなるものだ。

食事を終えて風呂に入り、残りの家事をすべて終えてから自分の部屋に戻る。そのころには夜の９時を回ったところだったが土曜日ということもあって全員ナイトコードに集まっていた。

『あ、アハト。こんばんは。』

先に俺が入ったことに気が付いたえななんが俺より先にあいさつする。挨拶を返して全員がいつも通り作業を進めている。全員集中しているので、ショーを見に行く話はひと段落してからでいいだろう。俺は奏から声がかかるまで特にすることがないので暇つぶし兼全員の集中力を上げるためにピアノでクラシックを弾く。ピアノの調律の仕方をググって物は試しとやってみたところ、絶対音感のおかげで道具に頼ることなく

すんなりとできたのだ。本来ならば調律師を呼ぶところなのだが、その必要はなさそうだ。

今回の作業はピアノの効果で集中できたのかは分からないが、休憩に入ったのは23時30分といつもよりも休憩に入る時間が30分ほど遅かった。

「ところで、明日って全員予定空いてるか？明日、フェニックスワンダーランドに知り合いのショーを見に行きたいんだが、４人以上だと入場料が半額らしいんだよ。」

休憩にはいったので全員の予定を確認する。

『ボクはいけるよ～。』

『私も明日は予定ないし大丈夫。』

『私も行く。明日は部活無いから。』

『わたしは外に出たくない。』

「Kは強制参加だ。ちょっとは外に出ろ。」

少し酷かもしれないが、やはり外の空気は吸った方がいい。夏場なら無理させたくないが今は冬だ。倒れることはないだろう。

『ところでさ、Kはいつから外に出てないの？』

「一応父親のお見舞いに行くために3日に1回ぐらい外に出てはいるし、一応昨日も行ったみたいだが、それ以外では家の中でも日光を浴びていないはずだ。」

回答を渋るＫの代わりに俺が返す。家の中もカーテンは閉めっぱなしで、掃除するときにはさすがに換気するがその時Ｋは自室にいるし、Ｋの部屋を掃除するときはカーテンを閉めたリビングに移動するので日光を浴びることはない。

『Ｋ、それはさすがに健康に悪すぎ。』

　普段は会話においてよく分からないを連発する雪だが、これにはさすがに突っ込んだ。

『うぐ、何も言い返せない…。』

　そんなこんなで、明日はニーゴのメンバー全員でフェニックスワンダーランドに行くことになった。さすがのＫも、雪にまで体に悪いと言われたのがショックだったのか、無駄な抵抗をすることなく外への連行を受け入れた。

　さて、明日は一体どんなショーが見れるのだろうか。こんなにも明日が楽しみなことはさらさらなかったので、気分はまるで遠足前日だ。とは言っても小さい頃の遠足は特に楽しみではなかったので、あくまでもただの模範的な例えなのだが。眠れるか分からないがまだ１１時４０分。まだまだ作業はするので今気にしても仕方がないだろう。

　そして休憩が終了したので、俺はピアノの演奏を再開した。ニーゴのメンバー曰く、この時の俺の演奏は音が少し弾んでいたらしいが、俺にはよくわからなかった。

第24話

メンバーのみんなでショーを見に行く当日、俺と奏は駅前で三人を待っていた。集合時間を5分過ぎているが、待たされることには慣れているので、特になにか思うことも無く奏と音楽の話をしていた。

奏が家を出るのをかなり渋ったのだが、昨日のまふゆの一言を蒸し返したら大人しく支度を始めた。

「おーい!お待たせー!」

走ってきたのは絵名と瑞希だった。ショーが始まるまでにアトラクションも回りたいという話をしていたので、ショーが始まるまでにはかなり時間に余裕があったのだが、遅刻は遅刻なので駆け寄ってきた。

「しかし、意外だな。まふゆは遅刻とは縁遠いと思っていたんだが…」

そう口にしたところでメールが届いたことを携帯が知らせる。

『ごめんね。今日はお母さんに勉強しなさいって言われたから、行けない。』

メールを確認してからみんなに見せる。

「お母さんが理由って…」

メールを確認した瑞希がそう呟いた。やけに意味深な態度だったから聞いてみると、まふゆと２人きりの時にナイトコードにまふゆの母の声が聞こえたらしいが、その会話の内容が毒親そのものだったという。

「ボクのお母さんがまふゆのお母さんだったら、息苦しくて嫌だなぁって心底思うよ。」

瑞希はそう吐露した。

まふゆは折り合いを付けるのが上手い。いや、上手いのではなく、とてつもなく下手だ。下手すぎるあまり、自分を見失ってしまったのだろうと思う。

親からの期待が大きかったのだろう。教師や他の生徒に優等生であることを望まれ続け、無意識のうちに押し付けられたのだろう。

まふゆは～が出来て偉いなぁ。さすが優等生だ。

一見普通の褒め言葉。しかしそれは時として人をしばりつける呪いになる。

賞賛は期待へ。期待は当然へ。

親や教師は一度出来たことならその先までできて当然だと言わんばかりに、優等生にはそういう風に自分の期待を勝手に押し付ける。

周りの生徒たちも当然優等生を押し付ける。

優等生はゲームセンターなんて行かない。優等生は規則正しい生活をして

いる。

自分が優等生ではないから、勝手に自分の中の優等生を押し付ける。その成れの果てがあのセカイだ。酷く歪で、何も無い、俺たちの居場所。セカイに居たミクは言った。セカイは想いでできていると。まふゆの想いは世界から消えて無くなることだと。

今でこそ今すぐに消えようとは思っていないだろうが、今だセカイには何も無くて、風さえも吹かない。冷たくて寂しい無のセカイ。

きっとあの時救えたと思った。セカイに一輪の花が咲いて、ほんの一瞬、彼女の心が見えて。

でも、救って終わりじゃない。彼女を取り巻く不条理は何ひとつとして変わっていない。

俺が彼女に何を言っても周りは何ひとつとして変わらない。いつも通りを押し付けられるつまらない毎日。

だけど、今度こそは救いたい。本当の意味で。

いい子であることを押し付ける親を。優等生であることを望む周りを。

まふゆを取り巻く全てをぶっ壊してやりたいと思った。

破壊。それはきっと、救うという言葉から最もかけ離れたものだろう。

でも、それでも。
自分の、自分たちの仲間である彼女を見捨てて手に入れる救いなんて要らない。そんなものは欺瞞だ。俺が最も嫌うものだ。
だから俺は彼女を、朝比奈まふゆを救うためなら…
朝比奈まふゆが、それを望むなら…
彼女を取り巻く世界を破壊して見せよう。

「…行くぞ。行先は、分かるよな。」
俺は仲間たちに問いかける。主語は省いた。だけど、彼女たちは俺の言わんとすることを理解する。たった数週間の付き合い。だけど、俺たちは仲間だ。
「うん。行こう。」
「当然でしょ！」
「もちろん！」
三者三様の返答。統率感なんて皆無。だけど、これでいい。言葉は違えど、性格は違えど、意思は一つなのだから。
俺たちは、本物なのだから。

駅前から離れて、学校からの帰り道にまふゆを送っていった時に知ったまふゆの家を尋ねる。インターホンは俺が押しても怪しまれるだけなので、絵名に任せる。インターホンを押してから十秒ほどで声が聞こえてくる。おそらく、まふゆの母だろう。

絵名がまふゆの友達であることを告げると、中からまふゆの母が出てくる。玄関口には大きな靴もある。日曜日だから、まふゆの父も休みなのだろう。

絵名が当たり障りの無い言葉でまふゆを呼ぶように言う。しかしまふゆの母は勉強中だからと断りを入れる。

そろそろ絵名も我慢の限界そうだったので、そっと手で押しのけて交代する。

「すみません、代わりました。まふゆの同級生の比企谷八幡です。」

まふゆの母は男？と疑念を抱いたようだが、宮益坂がテスト生を受け入れていることを思い出したのか、あぁ、と抑揚のあまりない声音で言った。

「それで？同級生さんがうちのまふゆになんの用です？」

いかにも迷惑ですと言うような声音で応対される。

「今日、友人5人でショーを見に行くことになってたんですけど、まふゆだけ来れないっ

て言われちゃったんですよね。」
「ああ、うちのまふゆは勉強熱心な子だから、今も勉強中よ。」
つくづく反吐が出る。あたかもまふゆ自信が勉強をしたがっているかのように話す。きっと、本人には押し付けている自覚がないのだろう。
「それ、まふゆが勉強したいって言ったんですか？短い付き合いですが、まふゆは約束を自分のためにほっぽり出すような人間では無いと思っているんですが。」
「ええ、そうよ。うちのまふゆはいい子だから。」
いい子、ね。親の心子知らず、という諺があるが、それはきっと逆でも成り立つのだろう。子の心親知らず。まふゆの母は、まふゆ自身を何も見ちゃいない。
「へぇ、そうなんですね。俺のメールには、親に勉強しなさいって言われたから行けないって来たんですけど。」
先程よりさらにイラつきの増した顔になる。
「さっきから何が言いたい訳？まふゆがあなたより勉強ができるからって僻んでるの？」
「そういう訳じゃないですよ。それを言うなら、お宅のまふゆさんは国語と英語だけは絶対に俺には勝てませんよ。」
受験に受かったあと、その学校で入試の成績を見ることが出来る制度があ

る。編入試験でも可能で、確認した所、国語と英語は満点。社会８２点、数学７２点、理科７０点、と言った感じだった。

国語と英語は歌詞を考えたりしていると勝手に身についた。社会も一応文系科目なので妥当。数学と理科は一桁を取るぐらい苦手だったが、音楽理論を学んでいたらできるようになった。

国語と英語はまふゆが満点を取れば引き分けにはなるが負けはしないので嘘は言っていない。

玄関口でずっと話していて、さすがに長いと思ったのか、まふゆの父も顔をだす。もはや口論になっている中での大黒柱の登場だが、みんな肝が座っているのか一切動じない。

「どうしたんだ?まふゆの友達か?」

「それが、まふゆを出せってしつこくって…。」

しつこいとは人聞きが悪いが、まぁ仕方がないのだろう。傍から見れば迷惑でしかないのだから。

「どうかしたの?」

まふゆが玄関口まで来る。

「ああ、ごめんなさいね。勉強の邪魔しちゃったかしら?」

「ううん、大丈夫。ちょうど休憩しようと思ってたところだったから。」
『いい子』のまふゆが母と話している。俺たちからすれば寒気がするが、これが朝比奈家の日常なのだろう。
「あ、八幡。どうしたの？みんなはショーを見に行くんじゃなかったの？」
『いい子』のまふゆが俺たちに気づいて話しかける。
「いや、これから見に行く予定だ。」
その後もまふゆの両親と口論が続くが、それは永遠ではない。
「まふゆは医者になるために必死で勉強しているのよ！邪魔しないでちょうだい！」
「いつまふゆが医者になりたいなんて言ったんです？将来の夢の話をした時には、まだ決まってないって言ってましたけど。」
本当の所はいつも通りの「よく分からない」だったが、それはぼかして話す。
「このままじゃ埒があかねぇな。」
ずっと平行線なので、ここで最終手段に出る。これでダメならば、俺は諦めよう。ただ、少しでも迷いがあるのなら…。
俺はまふゆの方に手を伸ばす。
「まふゆ。これはお前の意思で決めろ。俺たちとショーを観に行くか、行かないか。このまま一生、いい子でいるかどうか。行きたいなら、俺の手をとれ。行きたくないなら、

手を払え。俺たちは諦めて帰ろう。」
まふゆは驚いた顔をしていた。まふゆの両親は全力でまふゆを引き止めにかかる。だけど、まふゆは両親が思っているほどに、
『いい子』ではなかった。
「…お母さん。私、いつ、医者になりたいなんて言ったの？」
その瞬間、空気が凍りつく。
まふゆの両親にとっての未知。凍てついた雰囲気、虚無の瞳、酷く冷たい声音、感情の一欠片も感じさせない表情。
俺たちにとっての日常。いつも通りの雰囲気、いつも通りの瞳、いつも通りの声音、いつも通りの表情。
俺たちにとってのいつも通りが、まふゆの両親に取っては異常なのだ。
「…ごめんね、お母さん、お父さん。私は…いい子でも、優等生でもないの。」
そう言い放つまふゆの声は、両親にとっては先程と同じように聞こえたようだが、俺たちにとっては、まるで付き物が取れたような、清々しい声に聴こえた。
言い放ったあと、迷わずに俺の手を掴む。
この日、一体のマリオネットの糸が全て断ち切れ、自分の意思で歩き始めた。

本物を求める青年と救いたい少女たち　第２５話

　まふゆが俺の手を取った瞬間に駅に向かって走り出した。まふゆの両親はまだ状況が呑み込めていないのか、はたまたただ茫然としているのかは知らないが追いかけてはこなかった。奏の体力が思った以上に無く、１００メートルも走らないうちにバテてしまったのでこの結果は僥倖だった。

「奏…、お前もうちょっと体力付けた方がいいぞ。」

　俺がそう言うと、絵名と瑞希も頷いた。４人が平然と立っている中、奏だけは手を膝について呼吸を荒くしていた。

「いや…、でも……、普段はこんなに…、走らないし…。」

　しゃべるのも途切れ途切れだし、これは本格的に運動を奨めた方がいい。

　奏の回復を確認した後で、主に絵名と瑞希が喋りながら再び駅の方へと歩き出す。フェニックスワンダーランドについたらショーを見た後何のアトラクションに乗ろうかだとか、お土産は何を買うかだとか、パレードが楽しみだとか、今日この後のことを話す。話題が変われば、今日はいつもよりは気温が高くて暖かいだとか、奏の体力作りはいつにしようかだとか、どうでもいいことを駅に着くまで話す。その間、まふゆだけ

は一言もしゃべらずにただ黙って歩いていた。

「ねぇ、なんでそんなに私に構ってくれるの？」

駅に着いたときに、まふゆは心底不思議そうな顔で口を開いた。

まふゆは今まで、他人から本当の自分を見てもらったことがなかった。よく言えば優等生のまふゆ、いい子のまふゆとして、周りから認識されていた。最悪な形で表現してしまえば、自分の理想を押し付けられる相手として、手間のかからない相手としてまふゆは見られていたのだろう。もちろん見ていた相手は全員「無意識のうちに」だろうが。だからこそ、今まで優等生を演じてきて、演じないと誰も私を必要としないだろうと思っていたまふゆにとっては全く分からなかった。いや、わかったつもりでいた。

あの日、セカイで閉じこもっていたときに八幡や奏、絵名、瑞希が来てくれた。特に八幡は一週間もの間まふゆに付き添い、本当の、優等生ではないまふゆを真正面から受け止めたうえでそっちの方が好きだと言ってくれた。その後から来たみんなも同じことを言ってくれた。心配したとも言ってくれた。今日顔を合わせるのが初めてのはずなのに、涙まで流してくれて、虚無に還ってしまった心が少しだけ温かくなった。

それでも今回のことは分からなかった。だって、八幡たちがセカイまで来てくれたの

は、まふゆが行方不明になっていたからだ。急に音沙汰がなくなったからこそ探しに来てくれたのだろうと思った。
だけど今回は違う。まふゆは今回、家で勉強するからと言って断った。行方不明になったわけでもないし、迎えに来てほしいと言ったわけでもない。だけどみんなはまたしても来てくれた。面倒なくらい過保護なまふゆの両親に一歩も引かずに、まふゆのために口論を続けてくれた。その理由が、どうしても分からなかった。

まふゆの問いに、全員で答える。

「「「「５人揃って行きたかったから」」」」

この答えは４人で一言一句違わずぴったりそろった。
「え…、そんな理由で、来てくれたの？」
まふゆには今までそんな経験はなかった。遊びに誘われることがなかったのだ。優等生はそんなところにはいかないと決めつけられた。一緒に行きたいと思われても、誘われることは絶対になかった。
「おう。なんだ、もしかして不思議か？」

まふゆはこくりと頷く。

「なら、俺と同じ元ボッチだな。まふゆ、友達いなかっただろ。俺なんてむしろ誰からも話しかけられなかったままである。」

「八幡と一緒にしちゃだめだと思うな…。でも、まふゆに友達がいなかったってところはボクも同意見かな。」

「大体、まふゆが優等生なんてありえないでしょ、このグループ一の問題児！」

「絵名が言えたことじゃないと思うんだけどなぁ…。」

「ちょっと瑞希、今なんて言った？」

そうしていつもの絵名と瑞希の口げんかが始まる。

「５人で行きたいっていうのは本当だよ。だってニーゴは、１人でも欠けちゃだめだから。」

その奏の一言に俯いたまふゆに近づいてミュージックプレイヤーを渡す。

「これ、なに？」

俺がミュージックプレイヤーを渡したのを見て、絵名と瑞希は口げんかを止める。

「俺たち４人がまふゆのためだけに作った、この先一生世に出回ることのない曲だ。」

まふゆはすでにプレイヤーに取り付けていたイヤフォンをつけて再生する。最初は普通に聞いていたまふゆだったが、最後にはうっすらと涙を浮かべていた。

「そっか…。これ、私が初めてＫの曲を聴いた時の感じと似てる。いや、それよりもっと凄い。」
　俺たちが全身全霊を込めて作った曲は、まふゆの心に届いたようだった。
「これが、救われるってことかな…。今、心が温かいの。」
「届いたか?これが、俺たちの総意だ。」

　絶対に　もう二度と　一人にさせてあげないから

「私もみんなみたいに、誰かを救いたいな。」
　この時にまふゆが涙ながらに浮かべた笑顔は、真夜中を象徴する月のように明るいものだった。